大日本蠶絲會報

第貳拾參號

明治二十七年五月

（明治廿五年四月七日內務省許可）

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報第貳拾參號目次

●論說
◎蠶業時事　大日本蠶絲會贊成會員　練木喜三
◎米國の絹業　大日本蠶絲會贊成會員農學士　田原休之丞
●寄書
◎十八百九十二年新絲以來于八百九十三年まで一年間日本の蠶絲市況　横濱　大日本蠶絲會贊成會員　橋本重兵衛
●統計
◎調產額果年比較◎春夏秋蠶別果年比較◎三月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計◎三月中絹布類輸出數量及元價統計◎四月中横濱生絲手合高同最高價格及外國爲替相場表
●問答
◎桑葉其他の件に付き質問◎桑樹栽培及病害等に付き質問
●外報
◎二十六年中英國生絲市況
●雜報
◎評議員會◎規則改正追加◎議事規則◎四ヶ原蠶業試驗場の蠶況◎蠶絲に關する提出案◎琉球の產繭◎同伸會社重役の更迭◎府木蔓下の蠶業◎小學女生徒の養蠶◎繭市場を設置せんとす◎三陸蠶業家の大狩親會◎生絲取引の拒絕◎製絲場豊報（六件）◎蠶養神社に蠶祖大神◎米人日本式の養蠶を學ぶ◎各地通信（十七件）◎郡役所の諮狀◎官員錄◎大日本蠶絲會の加入◎博覽會出品入必得

◎大日本蠶絲會職員

○技藝委員
農學士　伊知地純之助
今西直次郎
伊藤左衛門
農學士　八田基也
橋本重兵衛
農學士　堀野正太郎
農學士　本多岩次郎
農學士　押川則吉
農學士　小野孫三郎
農學士　管野右衛門
農學士　大林雄也
農學士　横田時敬
農學士　高木井三郎
農學士　田中節三郎
農學士　田島武平
農學士　松永伍作
農學士　青木菅右衛門
農學士　佐々木元三郎
農學士　澤野淳
農學士　白井光太郎
農學士　下田伊左衛門
農學士　平賀義美
農學士　星野長太郎
農學士　木村喜三郎
農學士　岩崎多次郎
農學士　岩崎晃玉郎
農學士　佐々木忠郎
農學士　芝田宗郎
農學士　岡崎義郎
農學士　高藤平郎
農學士　佐藤有平
農學士　高橋信貞
農學士　高橋善藏
農學士　高橋右衛門
農學士　田中太郎
農學士　田邊也
農學士　松本九郎
農學士　藤村喜
農學士　藤本右衛門
農學士　下田町左衛門
農學士　田邊二郎
農學士　高橋二郎
農學士　岡崎禾郎
農學士　吉田宗郎
農學士　高藤郎
農學士　高橋信貞
農學士　高橋休之
農學士　高橋永之
農學士　高橋七郎
農學士　高橋義之
農學士　高橋永之
農學士　高橋七郎
農學士　高橋義之

○評議員
農學士　平田伊左衛門
農學士　下田伊左衛門
農學士　白井光太郎
農學士　澤野淳
農學士　佐々木忠郎
農學士　青木菅右衛門
農學士　永井元作
農學士　田島武平
農學士　田中節三郎
農學士　高木井三郎
農學士　横田時敬
農學士　管野右衛門
農學士　大林雄也
農學士　押川則吉
農學士　本多岩次郎
農學士　橋本重兵衛
農學士　堀野正太郎
農學士　星野長太郎
農學士　木村喜三郎
農學士　岩崎多次郎
農學士　佐々木忠郎
農學士　芝田宗郎
農學士　岡崎義郎
農學士　高藤平郎
農學士　佐藤有平
農學士　高橋信貞
農學士　高橋善藏
農學士　高橋右衛門
農學士　田中太郎
農學士　田邊也
農學士　松本九郎
農學士　藤村喜
農學士　藤本右衛門
農學士　下田町左衛門
農學士　田邊二郎
農學士　高橋二郎
農學士　岡崎禾郎
農學士　吉田宗郎
農學士　高藤郎
農學士　高橋信貞
農學士　高橋休之
農學士　高橋永之
農學士　高橋七郎
農學士　高橋義之
農學士　高橋永之
農學士　高橋七郎

○幹事長
大日本蠶絲會　練木喜三

○幹事
高橋信貞
松永伍作

大日本蠶絲會報第貳拾參號

●論說

◎蠶業時事　第三回大集會演說

大日本蠶絲會贊成會員　練木喜三

段々時刻も移りますし且つ是れ迄貴重な御話の打續きました後でございますから、最早や私の申上ることは剰身で申さば丁度ツマでございます、正味の所は食ツてしまツて後でツマに箸を出さうと云ふ樣な場合でございます、勿論最早や時間も餘程差迫ツて居りますに由ツて長いことは申上ませぬ、唯本の四分か五分時の間御耳を拜借致したうございます（謹聽）

後壁に掲げてございます演題は蠶業の時事と云ふのでございますが、是れ以て深き意味あつて下した演題ではない、詰り本會からの御請求に由りまして何ぞ差當ツて申上ませうと云ふ樣なことで、別段に腹拵のあッた次第でもございませぬが即ち時事、養蠶上差當り御互にドウであらうかと思はれますは本年の播立の時期でございます、御互ひに顏さへ合せますれば今年は如何であらう、何時頃の播立でござらうと云ふことは、即ち今日御互ひが談ずることである、ソコで本年はドウであらう、平年に比

して早いか遲いかと云ふの問題に付て、是迄の經歷を調べて見ると、丁度昨今の氣候の有樣は去ぬる二十四年に類して居る、御承知の通り去ぬる二十四年は近年稀なる豊年でございました、而して其搗立は何時頃であッたかと云ふと、勿論處に由ッて色々でございますが、東京邊では概して四月の月末でございました、今年は果して如何ございませうか、今一概に斷定する譯にも參りませぬけれども、彼の二十四年の櫻の咲き工合と今年の櫻の咲き工合とをば比較し來りますると、二十四年に櫻の一二輪開いた日は丁度三月三十一日でございましたが、本年も矢張り三月三十一日でございました、尤も花の早晩は申す迄もなく地方に由り、又地形に由り、又櫻の種類に由ッても異なりますから、是れ以て一概には申上られませぬが、我々の從事して居ります西ヶ原の試驗所の櫻は、即ち斯の如くでございました、けれども今年は二十四年に比べますると、午前と午後との違ひはございました、乃ち二十四年には朝の九時頃に已に一二輪開きましたが、今年は午後二三時頃に及んで始めて一二輪の花を見ました、左すれば本年は去ぬる二十四年に比べて見ると凡そ五六時間後れた譯でございます、處で其翌年即ち二十五年、及昨年即ち二十六年の花の咲き方は如何であつたかと云ふと、二十五年は四月九日に及んで始めて一二輪開き、又昨年即ち廿六年は四月六日に及んで始めて一二輪開きました、夫で養蠶は如何であッたかと云ふと、去ぬる二十五年は頗る後れ、昨年は早かッたけれども、二十四年より遲かッたと云ふ結果に相成ッて居る、左すれば本年の搗立ても矢張櫻花同樣二十四年に相類したものであらうかと存じられます、偖搗立の時期は右の如く考へられますが、本年の豊凶はドウあるぞと申すと、是は餘程六ヶ敷問題で、既に先程下田先生の御說もございました通り、處に由ッては隨分八釜敷い年柄であると云ふ事もあるに相違ございませむ、なれども亦古來御老人方の御申傳へになる御說を伺ひますに養蠶の早い年は必ず作柄の宜きものである、後るれば後るゝほど其作柄の惡きものであるとのこと、處で今試みに此老人方の御說が果して當るや否やを探究して見ませうに、餘り古いことは略しまして、去ぬる二十四年以來の豊凶に由ッて引合せて見ますと、二十四年は前に申ました通り非常な豊作であッた、聞くが如くんば同年を距る六十九年前に殆ど同樣な豊作が一度あッたと云ふこと、實に珍らしい豊作上手も下手も普な上出來で有ッたそうであります、次で廿五年はドウであッたかと云ふと打て變ッて非常な遲作、二十六年はドウあッたかと云ふと、養蠶の稍や早きに準じて結果も亦稍や宜しうございましたが、二十四年には及びませぬでした、さうして見ると勿論多少取除けはあるにもせよ概するに養蠶の早晩と其年の豊凶とは殆ど能く相伴ふて居るが如く考へられます、就ては先程高橋先生が沖繩縣の御話の序に養蠶の豊凶の係る所濕氣にありと云ふ御話し、如何にも其通り已に去ぬる二十四年は養蠶中非常な旱魃であッて蠶が大層早く進みましてございます、處で二十五年はドウであッたかと云ふと、濕氣の非常に多い年で從ッて雨も多く之を二十六年に比べて見ますと濕氣も多し雨も多し、從ッて晴天の日甚だ少く、日照時間亦少うございました、丁度其年の豊凶が濕氣の多

少に伴ふて居る、併ながら本年はドウ云ふものでございませうか、まだ是れからの事で能くは分りませぬが、右等のことに引き當てゝ見ますと、本年は差して悪い年でもなからうやに存じられます、又古老の言に養蠶前に雷鳴があれば必ず豐作であるとのこと、餘り當てにもなりませむが現に去る三月二十九日には御承知の通り雷鳴がございました、是れ亦豐作の徴なりとなすときは誠に御目出度い前徴でございます（拍手）

處で今年は果してドウか、幸ひにも下手でも取れると云ふほどの豐作年なれば必ず乾燥するでございませう、若し果して乾燥なりとすれば此處に大に注意の要すべきものがあらうと存じます、何ぜと云ふに如何に乾燥なればとて、一般から申せば決して養蠶に害なきは勿論ながら、肝心の絲目の出方と麥の實のり方とは相反して居るやうな結果がございます、已に去ぬる二十四年の如き滿は能く取れましたが、割合に絲目が寡なふございました、處で麥はドウかと云ふと、取方は少なうございましたが實りが宜うございました、例へば粉に挽き或は挽割に致しましてからが二十四年の麥は石が多く出たと云ふことで、夫で彼の六十九年前に當る年はドウであッたかと云ふと、麥の成長は僅か一尺ばかりで刈取ることも出來ず已むを得ず引き拔いたと云ふ位で、其年の麥の實り方は矢張り非常に宜かッたと申すこと、ドウしてさうなるかと申すと、溫度が高くて溫氣が少なければ蠶が進みます、もう一二度も桑を與へなければ眠に就かぬと思ふ中早や既に眠に就くと云ふ樣に、食ふ丈けの桑を食はせる事が出來ないやうなことの有ッた爲めで、若し果して本年も左樣な年柄とすれば、彼の廿四年の如き不意を食はない樣に御注意を願ひたい、とは申すものゝ固より氣候は中々煮て固めた樣なものでありませぬ、必ずしも今年が二十四年通り經過すべしとは假りにも斷言することの出來ぬ話し、されば若し之に反して溫氣多しとすれば勿論幾重にも乾燥を旨として養はなければならぬ、氣候は孰れにしても此御注意を申上たいが即ち私の主眼でございます（拍手喝采）

◎米國の絹業（第三回大集會演說）

大日本蠶絲會
贊成委員　農學士　田原休之丞

私の話すことは別段珍しいことでも何でもない、唯昨年シカゴに博覽會が開けました節に、御用を帶びて彼地に參りて居りました、其中少し餘暇がございましたから、紐育邊へ往ッて織物のことを調べました、併ながら織物は私の專門でない、私は全く一の百姓である、夫ぢやから織物のことを言ッても六かしいことは知らない、併ながら亞米利加で織ッて居る所の織物と云ふものは、日本から輸出して即ち亞米利加に輸入した生絲の半分以上も使ッて居る位であるから、織物の盛衰を調ぶることは、日本の生絲を改良するとか品質を改良するとか云ふことに向ッて必要なことでありますから、及ばずながら亞米利加織物の盛衰如何を調べた譯である、夫で珍らしいのでも何でもない、唯困ることには此盛衰を示すには、ドウしても勢ひ數字的のことを言はぬでは盛衰と云ふことは分らない、夫ぢやから已

むを得ず私は矢張り數字を申上て諸君の欠伸を見やうと思ッて居る、御承知の通り亞米利加人が進取の氣象に富んで、事業をなすに小仕掛けをやらず大仕掛けをやッて、十分に其事業を仕遂げて往くことは、恐らく他國の人も及ばぬ位であると考へて居る、而かも大事業をして成就することが妙である、其妙であるのは何かと云ふと、利益を收むる餘地が澤山あるから、自然大きな仕事を企てやうと云ふことに熱心從事して居る、殊に亞米利加の大事業は農業で、其次が工業であらうと思ふ、農業のことは見たり聞たりしたことがありますが、大日本蠶絲會には不必要でありますから申上ませぬが、工業の内で日本の蠶絲に關係の多い所の織物だけを御話しやうと考へて居ります、近頃亞米利加の織物がドウ云ふ景況になッて居るかと云ふことを見るに、其品質の改良したるは勿論のこと、夫を拵へるに用ふる機械を改良するとか、或は仕上ることが奇麗に仕上ると云ふ樣なことは、尤も進歩したる有樣になッて居る、其中で尤も私が改良したと云ふ感じを持ちましたのは、手機を廢して機械で織る機を拵へる樣になッたのが尤も改良したものであると考へて居る、御承知の通り亞米利加は職工の手間賃が高いことは、日本に比べますと八倍乃至十倍位高いぢやから、高い賃錢を拂ッて手機を使つて居る樣な有樣では中々引き合ふものでない、夫ぢやからして手機を廢して機械で働かせる樣になッて、手機は今は殆ど僅かになッて居る景況である、夫で今から數字的の御話を致しますが、千八百八十年即ち今から十四年前には、亞米利加の織物の産額は總計ドル位であるかと云ふと、六百萬弗ばかりである然るに今から四年前の産額を調べて見ると云ふと、千七百萬弗ばかりあッて、其增加して居ることが殆ど千萬弗ばかりである、即ち其增加の割合を計へて見ると倍數から超えて居る、併ながら近來亞米利加ばかりでもございますまいが、織物の下落したることは殆ど二割五分も直段が下ッて居る、下ッて居るにも拘らず殆ど倍から增加して居るのは、織物の産額が非常に殖えたと云ふ結果になッて來ると思ふ、其殖えたと云ふ有樣を示すには別に表がございます

州名	于八百八十年	絲綿及ミシン絲	廣幅絹及手巾	絹紐及レース	裝飾絹及小切絹
		封度	碼	碼	封度
カリフォルニア		九、五〇〇			四、六五〇
コンネチカット		三九四、九八一	二、二五三、〇七〇	八、五四一、二三五	六九五
イリノイス					一二、二二〇
カンサス				三、六〇〇	
メリーランド	四、二二五				
マッサチューセット					一、七八四
ミツゾリー	二七三、八一六		九九、一二〇		三九、七八九
ニュー、ハンプシヤメー				五七三、三二〇	六五
ニュー、ヨルシク	一、三〇〇				三〇〇
ニュー、ヨルシク	二五、五八〇		六、九七五、六五五	八、七九四、一〇〇	五〇、四〇五
ペンシルウエニア	八八、七六五		一、四二七、四三九	一〇、三〇二、六九六	四〇三、三三〇
ロードアイランド					二、一八七
ウハーモント	二三、一一〇		一〇一、〇〇〇	一、九一五、〇〇〇	一九二、八二四
					一、九〇〇
合計	二五一、八二一、五二八		一〇、八五六、二八四	三〇、一二九、九五一	七一〇、一四九

千八百九十年(其一)

州名	縫絲及ミシン絲	廣幅絹及手巾	仝	仝	仝	仝	絹紐及レース
カリフォルニア	一八、八二九						八七二、七八三
コンネクチカット	七七、〇四八	二、七四七、四二〇	六七五、一一七	一、九〇四	五、七一七		
イリノコ			一、〇〇〇				
メリーランド		七九四、三八三					三二、二九〇
マッサチューセット	三九〇、六八三						
ニュー、セルシー	四四、五六八	一八、一八〇、〇七二	五一四、二九五	一三、八二〇	三八六、五二〇	一四、六二九、二一四	
ニュー、ヨルク	四四、一六八	四、七九五、五五二	七二六、四七四	四四	一、六六五	八、四四七、四四一	
ペンシルウェニア	一四四、一七三	三、四三一、〇九三	二、七二五、九三四	五五二八一		一、六六四、六〇八	
ロード、アイランド						八九、八七五	
他諸州	三六、六一三	二七三、一五三					
合計	一、四四九、四六二	三〇、一七一、六七三	四、六四二、八二〇	七一、〇四九	三九三、九〇二	二五、七三七、二一一	

千八百九十年(其二)

州名	裝飾紐及小切紐	仝	仝	仝	仝	仝	仝
カリフォルニア	六四、〇六〇	七、一〇五	一、一〇五	一六〇			
コンネクチカット	六四、九四二						
イリノコ	二六五、〇二四		三、七五〇	一八、三四一			
メリーランド	一一、六〇〇			一、〇〇〇	二、〇〇〇		
マッサチューセット	三三一、七二七						
ニュー、セルシー	一六四、〇三六						
ニュー、ヨルク	三、二七六、二八四	九四、五〇〇	四五、九三六	六二、〇〇〇		一、一四〇	
チハイチ	一一、二六〇		四〇八、五七七	一〇六、六一八			
ペンシルウェニア	九八三、九一五						
ロード、アイランド			二〇、七四九	一、一六七			
他諸州		四〇、〇〇〇					
合計	二八、二八〇	二一七、四四四	四九一、五一二	一九〇、九八四	二、〇〇〇	一、一四〇	

前表に示すが如く絹物の產額は非常に殖えて居る譯になつて居りますが、此物を拵へる所の州はドウ云ふ處が重であるかと云ふと、亞米利加の總ての州が之を作るのぢやない、重なる處は僅かに五六箇國に止つて居る、名を云ふて見るとニューゼルシー州のパターソン町が一番盛んで、此處に往つて見ると全く織物屋ばかりで、烟筒から出て居る煙は皆な織物屋である、夫から紐育州、次はマサチューセッツ、コンネクチカット此等が盛んに絹物を作つて居る州である、此通り亞米利加でも出來るものでございますから、內國の生產上の競爭の結果として價は段々下落する、併ながら價が下落しても品質を落すことはない、却て改良してあるにも拘らず、內地の生產者の競爭のために幾分か直段が下落して居る、其爲めに絹物を用ふる人に便益を與へることは非常に大きなものである、故に今日の處で贅澤品と云ふ性質は幾分か失つて必要品と云ふ性質に變ずると云ふ位のことを云ふて居る夫れ丈け亞米利加の人間が絹物を澤山用ふる樣になつて居る、夫で斯の如く價格も產額も澤山殖えて來て居るが爲めに、外國から亞米利加に這入つて來る所の織物の實數は殖えて居りますが、割合には減じて居る狀況が現はれて居る、是も數字的で申しますと云ふと、千八百六十年今から三十四年前に、亞米利加で例へば百反なら百反使用するものとすると、內國で拵へた織物の何割に當つて居るかと云ふことを見ると、僅かに一割三分にしか當つて居らぬ、即ち總躰で百反用ふるとすれば、外國の品物をば八拾七反用ひて、內國の品物を十三反しか用ひぬ、處が千八百七十年には內國の生產が殖えて三割二分、即ち亞米

利加の織物で以て供給するのが丁度三割二分と云ふ數になッた、處が千八百八十年即ち今から十四年前には三割八分になッて、千八百九十年今より四年前には五割五分の絹物を消費して居る、故に半分以上は已に亞米利加の織物で米國人に供給する景況になッて居る、實に進歩の早いことには驚くべきものであると思ふ、斯の如く進んで織物の產額も價格も增加して來て、今申す通り米國の消費者に便益を與へることは大きなものであるのですが、夫だけになッたのはドウ云ふ風に往ッたかと云ふことを申上ますと、長い間でありますから僅か十年ばかりの比較を取て、亞米利加の絹業の發達はドノ位の度になッて居るかと云ふことを話さうかと思ひます、夫を話しますには五六箇條に分けて話した方が便利かと思ひます、第一には絹物の產額、夫から第二が夫を拵へる所の工場、第三が絹物を拵へるに資本が入る、其資本はドの位に出來て居るかと云ふこと、夫から其絹物を織る所の機械はドウ云ふ風なドノ位の進み方をして居るか、さうして大抵ドウ云ふ數になッて居るかと云ふことを申上やうと思ひます、機械の中でも手機がドの位とか、機械で織る機がドノ位と云ふことも合せて申上やうと思ひます、夫が即ち米國の絹業の發達を示すことになる、處が亞米利加は內國で拵へるだけのものでは中々追ッ付かないだから絹物を必ず輸入する、其品物はどんなもので、ドノ位の總躰に付て輸入して居るかと云ふことを話して、一番終りに日本に尤も關係があらうと思ひますから申しますが、生絲又は屑物の輸入、即ち亞米利加で織物を拵へる原料となる生絲はドレ位程遣ッて、ドノ位まで遣ッて居るかと云ふことを御話しやうかと思ふ、先づ是れ丈けの六つに分け御話をしやうと思ひます、處が是から先きが本當の數字的になッて來る、織物の產額を申上るには幾ツにも分ッて申した方が宜からうと思ふ

（未完）

●寄書

◎千八百九十二年新絲以來千八百九十三年まで一年間日本の蠶絲市況

横濱　大日本蠶絲會贊成會員　橋本重兵衛

横濱駐在佛國領事館書記長ジダロー氏の報告なりとして佛國外交官の通商報告に所揭せるものを摘記せん

横濱に於ける最初の取引は六月二十三日にして甲州草薙社製器械絲一番半より二番十/十を一捆六百五十圓を以て數捆を亞米利加に輸出せり而して市價は順次上進を示し七月朔頃には信州器械一番十/十は七百圓に同デニールにして一番より二番は六百八十七圓に價せり同月十五日頃までは佑客は少許の荷口も出市するに從ひ買ひ集めに氣を用ひたるものから信州器械一番十/十は七百十五圓に上州座繰一番より二番十/十六百六十五圓まで昇騰したりと雖も俄然反況を呈し米國向も頓と不振の姿となり左の如き衰勢を現ずるに至れり

器械絲　一番十四/十六六百九十圓より六百八十圓
仝　一番十四/十六十八六百六十五圓より六百七十四圓
座　繰　一番十四/十八六百四十圓より六百五十圓

以上の如き昇降にて殆ど變動なく同月を超えたり此時まで歐洲向細筋物の出市甚だ尠なく估客は競ふて之を手に入れんとして大に求むるに急なりし然れば一番十/十二は七百十圓に初手合ありて忽ち十圓より十五圓の高直を現はし仝月末一週間左の如き市價を呈せり

器　械　一番十/十二七百二十圓より七百廿五圓
仝　一番十/十三半七百圓より七百十圓
仝　二番十/十四より十二/十六六百五十圓より六百八十圓
掛　田　一番　六百五十圓

八月中は米國向の活況なると共に歐洲向き亦大に盛勢あり從て估價猛進し左の好直を呈するに至れり

最上器械十/十二　八百廿圓より八百卅圓
一番仝十/十二　八百圓より八百十圓
仝　仝十四/十六　七百七十圓より七百八十圓
二番仝十/十五　七百五十圓より七百六十圓
座繰一番十四/十八　七百卅圓より七百四十圓
掛田一番十四/十八　七百五十圓より七百六十圓

提絲二番半より三番五百六十圓より五百七十五圓

何れの品を擇ばず絲質精良なれば速かに需用せらるれども劣製物は捌口なく價格も別段に昇進せざりしなり

新絲季節以來二ヶ月間横濱への出荷高を算ふるに前年度(千八百九十一年より九十二年度)仝月間は百五十五萬五千斤にして現年度(千八百九十二年より九十三年度)は百四十四萬四千斤なれど前年度仝月間の輸出高は八十三萬三千斤にして現年度は百萬に達せり故に前年度の仝月間の在荷は七十二萬二千斤なりしが現年度は僅かに四十四萬斤に過ぎざりし

九月初より中浣までは市況稍や沈靜なりし此際市價は多少公稱するものあれども取引空絶となりしを以て荷主は大に困弊を極め殆ど罄懼の念を生じ業に既に投げ賣りもせん有樣なりしが毎度ながら荷主は僅かの困弊の爲めに市況の標準を顧みず忽ち自儘勝手に投げ賣を始めらるゝは閉口の外なし然るに幸ひにも漸く仝月廿日頃に至て米國向の大手合ありてより再び生氣に復し歐洲向も少しく取引ありて月末に至り一層活況を呈し百斤に付平均百圓方の昇進ありたり故に荷主は辭柄を設けて其慾の止まる所を知らざるものゝ如し爲めに却て再び取引上に一障碍を與へたるの觀ありしが結局左の如き市價の靜着するに至れり

最上器械十/十三　九百三十圓より九百三十五圓
仝一番十/十三　九百十圓より九百二十圓
仝一番十四/十六　八百九十圓より九百十圓

全三番　八百四十圓より八百五十圓
屑繰一番　八百五十圓より八百六十圓
全　二番　七百八十圓より八百圓
掛田一番　八百三十圓より八百五十圓
全　二番　七百四十圓より七百七十圓
提絲二番半より三番六百三十圓より六百四十圓

此間銀貨相場は少しく平靜にして佛國四ヶ月渡は三法七十三參より三法七十五參間を昇降するに止まれり

絲況は十月初週後より再び稍や活勢を見んとしたれども其際弗相場は四ヶ月渡三法八十二參に昇進し且つ估客は新絲以來大口の注文に對し既に相應の買入を了りたるものと思料したるものから市況の好面も永く持續する能はず勢ひ再び休商の姿とはなれり

而して其半月間は歐洲向は殆ど取引皆無なりしが米國向は獨り價格を甚だ賤落して漸く少許の取引を行ふを得たり

爲替の膨貴も永續せず再び四ヶ月渡は三法七十五參に復したり

殆ど有名無實にして且つ一定せざれども此際の絲價を案ずるに

器械一番　十/十三　八百七十圓より八百八十圓
全　全　十四/十六　八百七十圓より八百八十圓
全　二番　7/十五　七百九十圓より八百十圓
屑繰一番　十四/十八　八百三十圓より八百四十圓
全　二番　十四/十八　七百二十圓より七百卅圓
掛田一番　十四/十八　八百圓より八百十圓
全　二番　十四/十八　七百十圓より七百二十圓
提絲二番半より三番六百十圓より六百二十圓

十月末迄の總取引高を調ふるに前年度（前例に倣ひ）百八十四萬五千斤にして現年度は二百四十九萬五千斤に達せり又前年度の出荷概數は三百四十二萬斤現年度は三百四十五萬斤にして殆ど同數なれども其在荷（滯積）を較ぶれば前年度は百五十七萬五千斤に對し現年度は九十六萬斤に過ぎず

需用の急促と估價の強高は遂々以て製產額を增加したるべしと雖も自然質實の精功を不問に附したるの憾あり是を以て今や需用者間には嘖々の苦情ある敢て怪しむに足らず眞好蠶絲の年次稀少なるは亦慨嘆せずんばあらず

紐育市場向きの重もなる取引は十一月初めに當り一時は前記せる市價より十圓方安直にて手合ありたりしが取引の順時沈退するに從ひ市價も益々減低し殆ど休商の有樣にて同月を越せり然れども獨り歐洲向細筋物は前月以來の衰勢を回復して意氣揚々たるものゝ如し

此際の市價を銘記せば

器械一番　十/十三　八百四十圓より八百五十圓

全　全　十/十三　八百四十圓より八百五十圓
全　全　十/十五　七百五十圓より七百七十圓
座繰二番　十/十八　七百圓より七百十圓
掛田一番半　七百四十圓より七百五十圓
全　二番　七百圓より七百十圓
提絲二番半より三番九十圓より六百圓

數週間以來既に徐々下降せる爲替相場は十二月上旬後俄然一層の劇落を來し四ヶ月渡三法五十參より三法五十二參を昇降し而して現年度の晩期まで殆ど同一の況勢を保てり

市況の衰傾は痛く荷主を憂悶せしめ又千八百九十二年も日ならずして盡きんとするを見ては如何にしても賣了らんとの情念勃として禁じ難く遂に估價澄讓の策を取り估客をして再び市場に誘致するに至りしが此結果は日本人の常として外國の市況に影響を及ぼすをも知らずして自ら相場の暴落を招くに至るは遺憾の至りなり

十二月半ばより市場聊か盛餙の姿を現はし大口の取引もありたりしが是曾歐洲向きにして即ち佛、伊及日本も亦大に其製產を減じたる所の細筋物の注文なりしなり而して需用の急なる所より勢ひ直ちに相場を高め年末には左の如く昇騰の兆を呈せり

器械一番　十/十三　八百七十圓より八百九十圓
全　全　十/十八　八百五十圓より八百六十圓
全　二番　十/十五　七百七十圓より八百十圓
座繰二番　十/十八　七百五十圓より七百七十圓
掛田一番　七百十圓
全　二番　七百二十圓より七百卅圓
提絲二番半より三番六百十圓より六百二十圓

現年度の上半期間賣買高は三百七十三萬斤（前年度全期間三百十九萬五千斤）にして在荷は七十萬斤（前年度全期間百六十四萬斤）なり

市場は一月中常に活況を呈せしが重に其需用は既に稀少なる歐洲向細筋物の眞品を望むものなり而して絲價は取引毎に益々上進し遂ひに左の如く達せり

器械一番　十/十三　九百十圓より九百二十圓
全一番半　十/十八　八百四十圓より八百六十圓
全　二番　十/十五　八百二十圓より八百四十圓
座繰二番　十/十八　七百六十圓より七百八十圓
掛田一番半　七百八十圓より七百九十圓

二月に至るも依然市勢を變ぜず細筋物は愈々需むると急にして尚ほ細筋物に類せる品と雖も亦隨て出市する毎に騰昇せしが停滯せる劣品は甚だ粗惡且つ雜駁混交にして殆ど估客なき有樣なりしが若し此殘品にして能く改良を加へ眞製の品なりせば斯る場合に際し實に一層の大景氣を見たるならん

全　二番　十/十三　七百七十圓より七百八十圓
座繰二番　十/十八　七百五十圓より七百七十圓
掛田一番　八百十圓より八百二十圓
全　二番　七百二十圓より七百卅圓
提絲二番半より三番六百十圓より六百二十圓

市價は不同なりと雖も益々騰貴し細筋物は愈々需むるに急にして全品は他品より格外に貴く十二器械絲は遂ひに千圓に達せり

掛田絲は最早拂底を告げ米國向も此時よりして重なる賣買を見るゝ能はざるに至れり　（未完）

統計

◎繭産額累年比較

（農商務省調査に據る）

繭の生産額は明治二十四年を最近十ヶ年間の最多とし實に百五十八萬餘石に上る二十五年は之に次ぐ其近年增進の傾向は次の比較表に就て見るべし

	繭	玉繭	屑繭	出殼繭	計
十六年	九六〇、八一〇石	七二、七五六石	三五、一七八石	三七、二六四石	一、一〇六、〇〇八石
十七年	九五七、四〇五	一一二、六三六	五六、一九五	三七、〇二八	一、一六三、二六四
十八年	六六八、九二九	一〇九、四三四	五二、〇二二	二三、九八七	八五四、三七二
十九年	八七三、八一〇	一三八、〇四〇	七一、九五一	二八、六一八	一、一一二、四一九
二十年	九六三、九一八	一四一、八四八	七七、五二八	三五、七六六	一、二一九、〇六〇
廿一年	九三三、八一六	一三五、六三二	七九、二二〇	三五、六八九	一、一八四、三五七
廿二年	九二二、〇五二	一三八、八三五	九〇、二五三	三三、五四一	一、一八四、六八一
廿三年	九一六、七八六	一三四、二三三	八六、四五二	三四、八〇一	一、一七二、二七二
廿四年	一、二四九、九一二	一七九、五二五	一〇八、一四六	四二、六五七	一、五八〇、二四〇
廿五年	一、一三八、四六〇	一七八、一三四	一二三、七四三	四〇、三六八	一、四八〇、七〇五

◎春夏秋蠶別累年比較

（同上）

今春蠶夏蠶秋蠶の三種に就て之を見れば明治二十五年に於て春蠶は百分の七六夏蠶は一七秋蠶は七を占む又夏蠶春蠶の二者に就て之を見れば夏蠶は春蠶に對し百分の最多三十四より最少二十二にして連年減少の傾きあり

春蠶及秋蠶の二者に就ては秋蠶は春蠶の最多百分の九最少百分の五にして次第に增進の傾きあり故に秋蠶の增加は夏蠶春蠶の增加より急にして大なり

爰に又蠶卵紙の製造高を見るに二十五年に於ては二百八十三萬餘枚にして是亦最近の一兩年間に非常の增加を來せり即ち本業の日に盛大となるの徵候なるべく亦大に悦ぶべきなり

	春蠶	夏蠶	秋蠶	計	蠶卵紙
十九年	七九二、〇〇七石	二六八、四一〇石	三九、三六六石	一、〇九九、七七三石	一、六一九、九八九枚
二十年	九一二、一八三	二五一、二〇八	四二、二八〇	一、二〇五、六七一	二、三四五、七三一
廿一年	八八九、一一四	二二九、一六六	四七、七二八	一、一六六、〇〇八	二、三一五、三六〇
廿二年	八九九、八四〇	二一三、二四一	五九、一三四	一、一七二、二二五	二、一九八、三〇〇
廿三年	八六〇、五五七	二四四、八七六	六六、八三九	一、一七二、二二七	二、二九五、〇〇四
廿四年	一、二一二、三一三	二八一、一八九	八六、七三八	一、五八〇、二四〇	二、七九二、五四二

廿五年	一、一二四、二二二	二五二、〇七九	一〇四、四〇四
			一、四八〇、七〇五
			二、八三一、一五九

〔備考〕明治十九年より全二十二年まで計數前表全年の計數に吻合せざるは前表中には掛合の數を除きたるに因る

◎三月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計

種目	數量	元價	收稅
生絲	六〇一、一三三斤	四、四九七、九一二・九七〇	一四四、七一四・九九六
煞糸絲	一一〇、二二四	一二二、四七七・二〇〇	二、六五八・一六三
屑	一五六、四四三	一三一、九七三・七四〇	一、一三一・八二七
屑繭	八、〇〇六	一、四四一・〇八〇	五七・九二三
異綿	五、〇三五	九、一〇〇・〇〇〇	三二三・八二六
合計	八八〇、八四一	四、七六二、九〇四・九九〇	一四八、八八六・七三五

◎三月中絹布類輸出數量及元價統計

種目	數量	元價
羽二重	三二、四七九反	五〇七、二一三・五九〇
他の諸絹布類	八一五	九、〇〇四・七七〇
絹綿布類	一、三九三	八、〇七八・七二〇
絹布手巾	八一、七一五打	二二三、五三九・一〇〇

絹製品類		
合計	三四、六八七反	四一、五〇七・七九〇
	八一、七一五打	七八九、三四三・九七〇

◎四月中横濱生絲手合高同最高價格及外國爲替相場表

種目	手合高	手合最高價格 製絲場名	價格	外國爲替相場 倫敦參着	里昂參着	紐育參着
一 日休						
二 日九百十二個		信州開明社器械(春)(太)	八百二十五弗	二志〇片四分ノ二	二法五十四參	四十九弗二十五仙
三 日三百七十六個半		美濃百々開器械(細)	八百十弗	仝	仝	仝
四 日百七十九個		羽前五十嵐器械(細)	八百二十弗	二志〇片四分ノ三	二法五十九參	五十弗
五 日二百三十七個半		甲州開瀨組器械(細)	八百弗	二志〇片八分ノ七	二法六十一參	五十弗七十五仙
六 日百八十八個半		甲州矢島組器械(金)(春)(太)	八百十五弗	二志〇片八分ノ一	二法五十三參	四十九弗二十五仙
七 日十八個		福島共同捻ヲ金盃印	七百八十弗	仝	仝	仝
八 日休						
九 日四十六個		伊澤製絲會社器械(細)	七百八十弗	二志〇片四分ノ一	二法五十五參	四十九弗五十仙
十 日六十七個		除前佐藤器械(細)	未定	二志〇片二分ノ一	二法五十八參	五十弗
十一 日百三十個		飛州信山社器械(細)	七百九十弗	二志〇片四分ノ三	二法六十參	五十弗五十仙
十二 日十二個		磐城白清舘器械(太)	七百七十弗	仝	仝	仝

十三日	八十六個	關西發條取合	七百五十弗	仝	仝	仝	仝	五十弗五十仙
十四日	百二十八個	信州法竺社發條(大)	七百五十五弗	仝	仝	仝	仝	五十弗五十仙
十五日	休							
十六日	百二十一個	信州信英社發條(巻)(大)	七百七十弗	二志〇片八分ノ七	二法六十一巻	五十弗五十仙		
十七日	百十九個	信州龍上舘發條(巻)(大)	七百七十五弗	二志一片	二法六十二巻	五十弗七十五仙		
十八日	四十四個半	陸前佐藤發條(細)	七百三十弗	仝	仝	仝		
十九日	四百九十九個	信州大陽社発條(巻)(大)	八百弗	二志〇片八分ノ七	二法六十一巻	五十弗五十仙		
二十日	三百六十一個	信州長信社發條(巻)(大)	七百八十五弗	仝	仝	仝		
廿一日	九十四個	信州富國舘發條(巻)(大)	七百八十弗	仝	仝	仝		
廿二日	休							
廿三日	十五個	信州光榮舘發條(巻)(大)	七百十弗	二志〇片八分ノ七	二法六十一巻	五十弗五十仙		
廿四日	三百六十六個	信州開清社發條(巻)(大)	七百七十五弗	仝	仝	仝		
廿五日	百〇九個	信州對岳舘發條(巻)(大)	七百八十弗	二志一片	二法六十二巻	五十弗七十五仙		
廿六日	百七十個	信州歐米社發條(巻)(大)	七百六十弗	二志一片八分ノ三	二法六十六巻	五十一弗二十五仙		
廿七日	百十四個	近江製絲會社發條(大)	七百五十五弗	二志一片四分ノ一	二法六十五巻	五十一弗		
廿八日	九十一個	信州長信社發條(巻)(大)	七百八十弗	二志一片	二法六十二巻	五十弗五十仙		
廿九日	休							
三十日	九十個	信州本六工社(巻)(大)	八百十五弗	二志〇片八分ノ七	二法六十一巻	五十弗五十仙		

〔備考〕爲替相場の漸次昂騰せる爲めにや絲況は至つて不振にして恰も眠れるが如く殊に中旬は殆ど休業に等しき有樣にて絲價は概して三四十弗方の下落を來し且つ追々蠶期に迫まる爲め賣人は益す弱氣に傾くも絶えて應ずる買人なく唯太向きは細向きに比すれば聊か小取引ありたり

問答

◎桑葉其他の件に付き質問

群馬縣　大日本蠶絲會員　後閑源助

(一)桑枝を刈り採り凡そ一日間も貯藏して后ち葉を摘み採るときは枝條中にある養分をして葉へ發散せしむるが故に桑園より刈り採りて直に葉を摘み採るは不經濟なりと云へり植物生理上果して然るものなるや否や

(二)桑葉は茶、藍、煙草等の如く施肥の如何によりて結果に良否を顯すが如きとなきものや單に窒素成分に富める肥料をのみ施して葉のみ繁茂するを以て可なりとなし蠶兒に給桑し滋養の如何は敢て顧みざるものゝ如けれども若しも之を否なりとせば其適當なる肥料及桑中に含有する成分を問ふ

(三)露桑を乾燥せしむるに焚火をなして其傍らに掛け置き葉をして萎縮せしめざる樣乾燥せしむるも給桑後敢て害なきものや

(四)蠶蟲を靈定するに用ふる恰適なる眼鏡の名稱及販賣所代價等を問ふ

答

大日本蠶絲會技藝委員　農學士　本多岩次郎

(一)桑枝を刈り取り直ちに葉を摘み取るは枝條中に含有せる養分の未だ葉部に來らざるが故に刈枝後凡そ一日間も貯藏して後ち之を摘み取るを可なりと爲すものあるも決して斯の如き理由あらざるなり是れ畢竟刈枝後直ちに葉を摘み取るときは其葉の枝條に接着せし部より多量の汁液を漏泄するが故に斯の如き說を爲すに至るものならん凡そ樹液は枝葉の別なく常に上下に周流するものにして枝葉の未だ根部と接せるとき即ち刈枝前にありては此汁液の周流盛なるも既に切斷後時日を經過するに至れば此液流緩慢となり從て此際葉を摘み取るときは樹液の漏出多からざるも時日を經過せば枝條に存する養分の葉部に輸送せらるゝが如きことあらざるなり故に養分の點より云ふときは刈枝後直ちに葉を摘み取るも決して不經濟なりと云ふ能はざるなり然れども爰に一の注意すべきことあり他なし植物生理上の關係は右の如しと雖も養蠶上より之を言ふときは刈枝後直に摘葉せば右に述べたる如く液汁の漏出盛にして葉の濕潤せらるゝ恐れあれば成るべく一日位貯藏して後ち摘葉し以て給桑に供するを安全なりとす

(二)桑樹は施肥の如何によりては收葉に多寡あるのみならず其葉質にも亦優劣あるものなり而して桑樹は收葉植物なればとて窒素質肥料のみを施すときは枝條繁らず枝條繁らざれば多量の收葉あらざるなり加ふるに葉と雖も窒素質の肥料のみを以て能く生育するものにあらず同時に他の成分をも要するなり左記の分析表によりて之を知るべし表は刈桑百貫匁中に含有せる量と爲す（刈葉百分中葉三五、九新榾一二、一枝條五二、〇を含む）

	水分	蛋素	燐酸	加里
葉	八〇、一四	〇、九〇四	〇、一三一	〇、四八九
新榾（葉柄ヲ含ム）	八四、八六	〇、四二六	〇、〇八四	〇、四六四
枝條	二二、三八	〇、四九九	〇、〇八二	〇、三四八
桑樹ノ全体	五〇、六八	〇、六三六	〇、一〇〇	〇、四一三

故に桑樹に施すべき肥料は成るべく右表に示す割合に適合せるものを撰ぶを良とす猶該肥料に就きては本會報告第廿一號問答欄內桑樹肥料質問を參照すべし

(三)露桑を乾燥せしむるに焚火の側に掛け置き葉をして萎縮せしめざる樣に爲すも敢て蠶兒に害あることなしと雖も此法により萎縮せしめずして乾すは甚だ難事なりとす故に露桑を乾すには之を立て掛け扇風の如きものを以て風を起し之を以て其濕氣を發散せしむるを便とす其他乾燥せる莚に包み卷き置くも可なり

(四)蠶蟲を鑑定するとは如何なる件に就き鑑定するものなるや唯普通放大して見んには通常の天眼鏡にて可なるべしと雖も蠶蟲躰內の寄生物例之ば微粒子、白殭蠶徵、ピブリオ、ミクロコックス等の有無を檢するには顯微鏡に賴るの外なきなり顯微鏡及天眼鏡共東京市日本橋區本町三丁目松本市左衛門方にて販賣す代價は前者は六百倍にて五十圓內外後者は精粗大小によりて一樣ならずと雖も大凡一圓前後ならん

◎桑樹栽培及病害等に付き質問

島根縣　大日本蠶絲會員　兼崎源太郎

(一)東西南の三方は森林を以て圍まれ北は畠に接したる傾斜面にして深凹なる土地あり其表土は黑色に

して少しく粘質を帶び厚さ六寸位又其心土は赤色にして粘土なり之を桑畠に開墾せんとす適否如何

(二)桑園中に根刺桑ありて明治二十四年五月二十八日刺取りたり然るに發芽せる幹成長甚だ悪しく葉縮み手を觸るれば忽ち落つ此桑樹を明治二十五年三月二日掘上げ他の畠に移植せり然るに其移植せし分は其桑病を治したり又昨明治二十六年五月三十日刺取せしものにして前掘上げたる桑樹の隣株に前同樣の桑病を發したり此地質は表土黑色の粘土なり心土は白色にして甚だ堅く鍬を以て掘るも容易に掘り難き地なり表土は六寸位あり右桑病の原因及豫防法敎示ありたし

(三)根刺桑の霜害を防ぐ爲め其幹を結び立て莚を以て包み發芽六七分になる迄其儘になし置くは桑樹に害あるや素より霜害を防ぐ爲めなるが故に少しは害あるも此法を施すを可とするや

答

大日本蠶絲會技藝委員　船津傳次平

(一)森林の中を開墾して桑を植うるも四五段以上もある地なれば可なるべしと雖も狹き所なれば植うべきものにあらず若し植うるときは三四年にして衰弱するものなり

(二)表土は黑色の粘土なりと粘土には桑は適せず然れども小砂利の混交したる粘土なれば幾分か成長すべし次に表土は深さ六寸位あり其下の心土は白色にして甚だ堅く鍬を以て掘るも容易に掘り難しと此の如くんば桑を植うるには不適當の地ならん次に發芽成長悪しく葉縮みとなり手を觸るるときは忽ち落つとあれば紋羽病か將た縮葉病ならん何れにしても掘り捨つるの外明案あるを知らず

(三)根刺桑を束ぬるは霜害を防ぐ爲めに束ぬるにあらず十月頃樹間を鋤起すの便と枝梢を直からしめ翌春の發芽に泥土を着かしめざるが爲めなり尤も霜害多き地なれば少しく發芽の後に於て束ねを解くは幾分か霜害を防ぐ効あるものなりと雖も發芽には幾分か妨げあるものなり

●外報

◎二十六年中英國生絲市況

英國に於ける生絲の市況に關き在倫敦帝國領事館事務代理書記生吳大五郎氏より本年二月十五日附を以て其筋へ左の如く報告ありたり

昨二十六年に於ける英國生絲市況を通觀するに此一年間に善悪共に其極端を現し春季の大好望は秋季の大失望と爲り開屑年を初め繭目年を終り本年に入りても市場尙ほ晦昧にして幾雲之を蔽ふものの如し然れども單に我日本生絲上より論ずるときは昨年は不幸中に幸を得たる年にして我機械絲及坐繰の新輸入ありて始て英國製絹家の間に聲價を博し大に將來に發達の望を生じたり

抑々昨年は過多ならざる在荷を以て年を初め例の米國シカゴ博覽會の宛込ありたるため需要は月を逐ひて增加し製絹家は殊に上等絲の在荷缺乏せんことを恐れて續々買入を爲したるため次第に相場を引上げ伊國絲の如きは四月中旬には前年平價の倍に達し一時は非常なる好況を呈し隨て大に輸入を奬勵したり然れども此好勢は長持せず第一に之を搖きたるは五月中に起りたる濠洲に於ける銀行騷きの影響倫敦金市を搖動したる事にして之に踵ぎて米國經濟上の危急困迫起り其國內製絹業は殆ど全體休業の姿と爲り加ふるに伊太利、日本、支那に於ける蠶絲作十分なりとの報達したるため絲價

忽ち跌落したり之に加ふるに一方には絹業不振の色漸く現れたる上に後の有名なる炭坑夫の同盟罷工は更に内國製絹業の工事を妨遏し大に生絲の需要を減殺し一方には銀價の暴降起りて自ら東洋絲の價格下向と爲りしを以て市場に於ける絲價は年を終はる迄漸次卑きに就くのみにして年末の相場は年初に於けるより二割以上の低廉と爲りたり即ち左に昨年及本年初に於ける當市各絲の相場と昨年四月中に達したる最高價を掲げて其高低の甚しかりしを對示すべし

絲種		二十六年初	年中最高價	二十七年初
日本	機械絲 上等	なし	十六志(但八月中)	十四志六片
	次等	なし	十四志(但八月中)	十二志六片
提絲	信州	十四志六片—十五志	十七志六片	なし
	八王子	十三志	十三志六片	なし
	生絲「ヨリ」	十九志六片—二十志六片	二十四志—二十六志	十五志六片
伊太利	絲 絲上等	二十四志—二十六志	三十二志—三十四志	二十志六片
同	並等	二十三志	三十志	十八志
經	絲	二十一志六片—二十志六片	二十九志	十七志六片
七里絲上等		十三志六片—十四志	十四志六片—十五志	十三志
同 下等		九志三片—十三志	十志六片—十四志	八志—十二志三片
支那「ダイサム」		九志三片—十三志	九志六片—十三志	八志—十一志
廣東		八志六片—十志九片	十二志	八志—十志
廣東	絲	二志六片—四志	二志六片—四志	二志六片—四志
「ペンゴール」絲		十二志—十三志	十七志	十一志九片—十二志三片

日本絲　從來日本生絲の英國市場に現るゝものは重に提絲の下等品にして機械絲若くは坐繰の上等絲は未だ英國の需要を得ざりし其原因に至りては既に當館より屢〻報道したる如く英國に於ける製絹業は重に下等絲を以て製造し得る天鵞絨類、扇繻、椅子張用及窓掛用等の緞子類、襟飾等にあるを以て下に記する輸入表に現然たる如く多くは支那及日本の安絲を消費し假令細絲上等品を需要するも多くは伊太利絲若くは印度絲にあり日本の機械絲若くは坐繰の上等品に至りては未だ製絹家の知遇を得ざるものゝ如し固より英人全く我生絲の廉價を知らざるにあらずと雖も第一には英國製絹業に上等絲を使用することに限りあると第二には英國人守舊的性質の强きため從來慣用したる絲に戀々して特別の理由を見るにあらざれば進て新絲を試むるの氣性なきに依り今日迄日本上等絲の英國に販路を得ざりし所以なるべし然るに前述する如く昨年春夏の交伊太利絲非常に騰貴したれば年來伊太利絲を使用したる英國製絹家も自ら他絲に其供給を仰がざるべからざるの必要を感じたるに恰も好し其頃日本より米國への輸出は大に減殺したるため横濱輸出商は多少其荷を倫敦へ廻送したるに其品位は殆ど伊國絲と頡頏し其價は大に廉なるより忽ち之を英國製絹家の需要に供するを得て始て英國製絹に使用せられたり然るに其結果は何も意外に滿足にして大に製絹家の好愛を起し引續き日本上等絲を以て其製造の原料に充てんと當地生絲商に報告したる製絹家もありと云ふ此の如き勢なるを以て昨年夏以來は我機械絲及坐繰の相場は始て當地生絲商相場附に登るに至り昨年の取引は重に右二品にありて從來の提絲は却て人の注意を惹かざるに至りたるが如し是れ實に昨年を以て當國に我機械絲及坐繰の新路を開きたるの初期と謂ふも敢て過言にあらざるべし故に此機會を失はず屢々其販路を擴張すること肝要なり然るに不幸なるは本年に入り未だ絹業恢復の兆候なく絹物商は未

だ本年夏秋に於ける流行物に關して何たる目的をも附け得ざるため內地の製絹家は凡て手控への姿あれば目下日本上等絲の需要は一時杜絕せるの市況を呈せり且つ本邦に於ては目下米國向大に勢を得て其價騰貴し銀貨相場は未だ靜定せざる等のため將來の目的は確報すること能はずと雖も兎に角昨年に得たる英國製絹家の好愛は大に將來の販售に關係を有する明なり故に本邦製絲家に望む所は日本上等絲の聲價は已に世界に遍く其販路は益〻廣大に赴くの傾あれば此後は尙ほ其聲價を落さゝるがため既得の位地を失はざる樣製絲の精選と價格の平準を保つことに努て注意せざるべからざるなり玆に又我上等絲の將來に關し英國に注意すべきことあり已に前に述べたる如く英國の製絹業は其規模に於ても歐米の如く盛大ならず其製品に於ても歐米の如く上等ならずと雖も近年來英國絹業を恢復せんとの念强きを致し上等社會の夫人等王族貴族を初め自國製品のみを衣服其他に使用せんとの目的を以て創設したる一の協會あり製絹實業家の組織せる英王國絹業協會と相聯合して其方向に運動し或は公會を開きて其演說を爲し或は展覽會を設けて其實物を示す等大に努むる所あれば其影響は緩慢ながらも將來には英國絹業殊に上等品の製造を奬勵することゝ爲るべし然れば其製造原料に關しては我機械絲及坐繰の上等品こそ最も適當なれば將來に益〻望を屬すべきものと信ず

昨年間日本よりの輸入は當國稅關表に據るに量額二十五萬三千六百十六封其價額十六萬八千三百八十磅にして前年よりは殆ど五倍の增加なり然るに昨年中其取引賣高は却て前年より四萬封以上の減額にして即ち九萬七千百四封に過ぎざりしかば年末の在荷は非常に多きを現し二十一萬三千五百八十四封なり詳細は更に下記の表を見て知悉すべし

支那絲　昨年日本絲の聲價益〻眞好を加へたるに反し支那絲は稍〻人氣を落したるが如し蓋し昨年七月頃到着の荷中大に品位劣等のものありたるため曾に一時其價格を跌落したるのみならず當業者に强く一の感觸を與へたり即ち將來支那に於て其製絲上に改良を加へて時好と共に進まざる以上は其前途虞るべきの感を與へたり然るに支那絲は英國市場に於ける年來の立物にして其需要は尙ほ最も多く輸入總額の過半を占め居れば日本絲之に打勝ちて英市を壟斷するに至る固より容易の業にあらず十分の年月と忍耐力とを要すること勿論なりと雖も其之と競爭して英國の好愛を博するの政策は只敵絲の缺點に乘ずるにあるべし即ち一般に我製絲の品位を進め均一を旨とし其價格も支那絲と平準を保つことを謀るにあるべし尙ほ昨年間支那絲輸入高及消費高等は下表に就きて徵知すべし

伊太利絲　昨年初より好況を呈し價格を上げ四五月頃に至りては非常の高價を博したる影響は大に伊太利の養蠶業を奬勵し繭の價も前年は三法六十參のものが昨年は六法の高價を以て賣初めたる位なれば昨年の蠶絲製造は非常に多かりし然るに昨年伊國の金融大に逼迫を極め紡絲家及絲問屋は當年の如く養蠶家に十分の金貸を爲す能はざるの難境に遭ひ一方には需要頓に減少し一方には銀價下落のため日本絲に競爭を受けて益〻不利の位地に陷り大に其市價を落せり且つ當地生絲商にして此頃歐洲養蠶地方を巡見したる者の說に依るに昨年作の伊國絲は半分も賣れずして今尙ほ夥多の控へ荷を有し居れば次の賣出時期には新舊兩作共に市場に現るゝべければ近日の下落にて本年の養蠶業を多少抑制して製絲自ら減すべしと雖も實際市上に現るゝものは意外に多かるべしと云へり又或る當業者は伊國絲の將來に關し面白き說を爲せり曰く近來の如く銀價下落ば銀貨國の蠶絲の歐米に於

ける實績安きを致すを以て金貨國の蠶絲は痛く價格上に於て競爭を受くべし只年來歐洲製絲の聲價を有する所以は其品位の東洋絲に勝るにあるのみなり故に若し銀貨國に於て其養蠶絲を改良進歩せしめて能く歐洲製の如き上等品を製出するに於ては十分之を壓倒し得るの實跡益〻明なるが如しと然れば東洋絲の先鋒と爲り伊佛製絲と市場を爭ふものは日本絲を除きては他に此衝に當るものなかるべし故に我製絲家に望む所は目的を遠大にし其製品の格位を進め勝を將來に期して右營業者の豫言を當中せしむるの準備を爲すにあるべし

統計　當國稅關報告に依れば昨年間各國絲輸入高は第一表の如しと雖も生絲仲買商の調製に依れば第二表の如き計數を掲げり蓋し兩表に差異ある所以は統計調製方の一樣ならざるに依るなるべし何も參考と爲るべきを以て茲に共に之を掲示す

英國輸入生絲額第一表（稅關報告に依る）

輸出國	二十五年 量	二十五年 價額	二十六年 量	二十六年 價額
支那	九〇〇、七〇五	五四四、六四〇	一、四四五、四九五	八七七、〇七四
印度	一、七一、三六二	一二〇、四四八	三二三、五九四	二〇八、四〇〇
日本	五七、六六二	三六、六六〇	二五三、六一六	一六八、三八〇
其他諸國	三七三、五五三	二九二、三〇六	二五〇、四七四	二〇九、八七七
合計	一、五〇三、二八三	九九四、〇五四	二、二七三、一七九	一、四六三、七三一

同第二表（イートン社の調製に依る）

絲種	二十五年	二十六年
支那七里、「ハイニン」等	七六一、六三二	二、〇四八、七六四

種	消費及輸出高 二十五年	消費及輸出高 二十六年	年末在荷高 二十五年	年末在荷高 二十六年
支那 七里、「ハイニン」等	九六五、五三二	九六六、四三〇	一、〇五八、五五六	一、一〇一、九六八
支那 「タイサム」四川等	一七四、六一四	一四〇、〇四六	一八八、七〇〇	二五四、六九四
支那 蠶絲	四三、八一〇	一八、二〇〇	一六、九〇〇	一八、〇七〇
廣東絲	一八八、七六〇	一三九、九八四	二三七、七四四	三〇五、八六四
廣東木	一四〇、三三六	九七、一〇四	七六、七二〇	二一三、五八四
日本	一七六、五五〇	一七六、二五〇	一一七、四五〇	二六〇、八五〇
同「タイサム」、四川等	四九、九八〇	一九、二四〇	一九七、八八〇	二〇〇、〇二〇
同野蠶絲	一九、二四〇	九九、〇〇八	一九九、五七六	二三二、六二四
同廣東絲	九九、〇〇八	六六、七五二	二三二、六二四	三一、九〇五〇
日本絲	六六、七五二	一七六、八五〇	三一、九〇五〇	
「ベンゴール」絲	一七六、八五〇			

但し歐洲產輸入は未詳なり

右二表に現然たる如く昨年の輸入は何も前年より著しく增加せるは全く上半年の好景氣に奬勵せられたるに依るもの爲るに下半年に於ては需要頓に減少したるため實際取引高は却て前年より少かりしと下表に見ゆるが如し隨て本年には非常なる在荷を持越したり即ち「イートン」社の調製に依るに左の如き統計を示せり

雜報

◎評議員會

去月二十八日西ヶ原蠶業試驗場内に於て午後第一時より評議員會を開きて大日本蠶絲會規則の改正追加を爲し且つ新に議事規則を議定し又規則第十一條の但書に據り幹事長及幹事の半數改撰を爲すため抽籤を以て留任者と退任者とを定めたるに其結果として幹事長岡殺幹事松永伍作の二氏は留任幹事高橋信貞(再任)練木喜三(新任)の二氏得票多數にて當撰せり次に改正規則第十五條及第十六條に據り東京府の下田伊左衛門埼玉縣の木村九藏栃木縣の永島禮七の三氏を地方委員に撰定したるを以て夫々囑托せり

◎規則改正追加

前記評議員會に於て議定したる大日本蠶絲會規則の改正追加は左の如し

第四章　技藝委員及地方委員

第十五條　本會ハ學術技藝ニ關スル事項ノ調査或ハ質問ニ應答スル爲メ技藝委員ヲ置キ會務ヲ擴張スル爲メ地方委員ヲ置ク但其數ヲ定メズ任期ハ三ヶ年トス

第十六條　技藝委員ハ會頭ニ於テ會員中學術又ハ實業ニ熟練ノ者ヲ撰定囑托スルモノトス

地方委員ハ評議員會ニ於テ地方會員中名望アル者ヲ撰定シ會頭之ヲ囑托スルモノトス

第十七條　會頭ノ委囑ニ由リ技藝委員及地方委員出張若クハ巡回ヲ爲ストキハ本會定則ノ旅費日當ヲ支給ス又地方委員ニ於テ要スル通信運搬料ハ其實費ヲ返償ス

（後頁）

第四章　技藝委員

第十五條　本會ハ學技藝ニ關スル事項ノ調査或ハ質問ニ應答スル爲メ技藝委員ヲ置ク但數ヲ定メズ

第十六條　技藝委員ハ會頭ニ於テ會員中ヨリ學術又ハ實業ニ熟練ノ者ヲ撰定囑托ス

第十七條　技藝委員ニテ臨時出張等ヲ爲ストキハ相當ノ旅費日當ヲ支給ス

◎議事規則

前記評議員會ニ於テ議定シタル大日本蠶絲會ノ議事規則ハ左ノ如シ

第一條　議長ハ評議員ノ互撰ヲ以テ之ヲ定ム　第二條　議員ノ席次ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム　第三條　議員ノ稱呼ハ番號ヲ用フベシ　第四條　議事ノ終始ハ議長ノ指揮ニ由ルベシ　第五條　議案ハ會頭ヨリ之ヲ發ス　第六條　會頭ハ代理者ヲ以テ番外委員トナシ議案ノ說明ヲ爲サシムルコトアルベシ　第七條　議員二名以上ノ贊成者アルトキハ建議案ヲ提出スルコトヲ得　第八條　議事ハ一次會二次會、三次會ニ區別ス　第九條　一次會ニ於テ其大旨ヲ議シ二次會ニ於テ逐條議決シ三次會ニ於テハ全案ニ就テ討議確定スベシ　第十條　修正說ハ二次會、三次會ニ於テ提出スルコトヲ得但贊成ナキモノハ議題トナスコトヲ得ズ　第十一條　已ニ否決シタル修正說、建議案ハ同會議ニ於テ再ビ提出スルコトヲ得ズ　第十二條　議事ヲ開クトキハ議長書記ヲシテ議案ヲ朗讀セシム　第十三條　議案ノ旨趣ニ付キ質問スベキコトアラバ議員ハ議長ノ許可ヲ得テ其說明ヲ求ムルコトヲ得　第十四條　可否ハ出席議員ノ過半ヲ以テ決ス若シ可否相半スルトキハ議長之ヲ決ス　第十五條　出席ノ議員ハ可否ノ數ニ入ラザルコトヲ得ズ　第十六條　委員ヲ撰ビテ議案若クハ修正案ヲ調査セシメントスルトキハ會議ノ決ヲ取ルベシ　第十七條　委員ハ議員中ニ於テ議長之ヲ命シ又ハ議員ヲシテ之ヲ

撰擧セシム

◎西ケ原蠶業試驗場の蠶況

農商務省農務局西ケ原蠶業試驗場に於ける蠶兒飼育の概況は左の如し

第一報

蠶種の貯藏及催青

本場の飼育に供せる蠶種は昨明治二十六年十一月十日を以て貯藏器に納めて保護せしものにして其貯藏中の温度は左表の如し

平均温度表

種別＼目標	十一月十日	十二月一日	月二日	月三日	月四日	平均
貯藏器内	五〇度	四一度	三八度	三九度	四六度	四五度
室外	四九	四一	三九	四一	四八	五七

斯て四月十日に至り早生桑芽の開綻時方に來れるを認め仝日午後三時讀質改良試驗用小石丸及蕎圓室飼育の小石丸青熟等を催青室に移し次第に温度を高めて其發生を促せしに仝月十八日に至り蠶卵悉く戰色し數十頭の蠶兒發生するを見たれば之を掃棄て翌日掃立の用意を爲す而して催青中は常に室内の乾燥甚しきを以て始終水を撒布し或は蠶箔に濕潤を敷き架の下段に置き以て過度の乾燥を豫防せり催青中室の内外に於ける最高最低及毎日平均温度は左表の如し

種別＼目標	室内温度 最高	室内温度 最低	室内温度 平均	室外温度 最高	室外温度 最低	室外温度 平均
十一日	六三度	六一度	六一度	五四度	五一度	五二度五
十一日	六六	六二	六三、五	六六	五〇	五八
十二日	七〇	六一	六五、五	四九	四九	五六
十三日	七〇	六〇	六五	六三	五一	五五、五
十四日	七二	六八	七〇	六〇	五五	六一、五
十五日	七四	六三	六八、五	六八	四九	五九
十六日	七五	六〇	六七、五	六八	五一	五九、五
十七日	七四	六四	六九	六〇	四六	五三
十八日	七二	六四	六八	六七	五三	六〇
十九日	七七	六五	七一	六九	五四	六一五

以上は早播に屬せるものゝ景況なり次に第二回掃立は仝月十六日を以て催青に着手せり主に傳習用の蠶種にして即ち仝日午后二時貯藏器より取出し催青室に移したりしに仝二十一日悉く戰色し二十三日より二十四日に掛け續々發生せんとするの徴あり故に二十四日を以て其發生せし少許の蠶兒を掃棄て紙に包み二十六日午前之が掃立を施行せり催青中室の内外に於ける最高最低及毎日平均温度は左表の如し

種別＼目標	室内温度 最高	室内温度 最低	室内温度 平均	室外温度 最高	室外温度 最低	室外温度 平均

十六日	七三	六一	六七	六八	五一	五九	五五
十七日	六九	六〇	六四、五	六七	四六	五三	六二、五
十八日	六九	五九	六四	六七	五八	五三	六一、五
十九日	七四	六四	六九	六九	五四	五一	六〇
二十日	七二	六八	七〇	六四	五六	六〇	六三、五
廿一日	七六	六二	六九	七五	五二	五四	五八、五
廿二日	七〇	六二	六六	六〇	四八	五一	六一、五
廿三日	七一	六〇	六五、五	五七	四五		
廿四日	七五	六六	七〇、五	六九	四八		
廿五日	七二	六六	六九	六四	五九		

蠶見掃立の種類、期日及飼育の目的

當場本年の掃立は四月二十日に始まり同二十七日に終れり就中掃立蟻量の多かりしは仝二十六日にして之を客歳に比するに最始の掃立は早きこと六日最終の掃立は早きこと三日最多數の掃立の早きこと亦三日とす而して飼育の目的蠶見の種類及其蟻量は左の如し

第一室　繭質改良試驗　赤熟、青熟、小石丸　三匁八分四厘

第二室　蠶種餘附試驗　小石丸　六匁
　　野桑試驗　小石丸　二匁

第三室　蠶種密藏試驗　赤熟　一匁五分
　　蠶種浸水試驗　小石丸　四匁〇二厘

第四室　稚蠶飼育試驗　小石丸　四匁
　　仝功繭試驗　仝功繭種　五分

第五室　蠶の種類試驗　白玉、又書、角又、銀白、純白、清白、掛合、黑羽、青白　五匁四分

別室
　蒸害試驗　青熟　一匁五分
　濕害試驗　青熟　一匁五分
　蛆害試驗　青熟、赤熟　一匁八分
　微粒子試驗　小石丸　三匁八分
　交尾試驗　佛國種　四分

製團室　蠶種製造用　青熟、赤熟　十三匁九分
　　小石丸、清白　四十一匁四分八厘

傳習室　青熟、小石丸　八十二匁〇四厘

合計

第一齡及第二齡飼育中の景況

蠶見掃立中即ち早掃の蠶見一齡中は天氣宜しからず終日晴天一日、半晴半雨一日、終日曇天三日、半曇半雨一日、殆ど終日雨天なりしを二日とす此間時々非常の冷氣を催し最低四十五度に降れると二日、四十七度を示せること一日あり雨日多きに準じ濕氣は概して多き方にて八十度以下の日は僅に三日に過ぎず然れども室内は平均七十度前後の温を保ち濕氣は六十度乃至七十六度の間に在り蠶座の乾燥憑しきを覺へたるは五月一日及三日のみなりき今其大躰に就き掃立眠起の早晩を揭ぐれば左の如し

早　掃　中　掃　晩　掃

一　齡（掃立）四月二十日午前十時　四月廿四日午前十時　四月廿七日午前十一時
（斷飼）同月廿六日午前十時　同月三十日午前九時　五月二日午後十一時
（蛻蛻）同月廿七日正午十二時　五月二日午前六時　同月四日午前四時

二　齡（餉食）同
（斷飼）五月一日午後八時
（蛻蛻）同月三日正午十二時

傳習室は去る四月二十六日午前九時を以て悉皆掃下せり總蟻量四十一匁四分七厘の内小石丸は十九匁八分五厘にして青熟は二十一匁六分三厘とす一齡中の平均溫度は七十度全濕度は七十一度にして給桑回數は各四十六回總給桑量十一貫百四十九匁四分を要せり此内小石丸には五貫四百四十八匁五分にして蟻量一匁には即ち二百七十四匁六分、青熟には五貫七百〇〇八分にして蟻量一匁には即ち二百六十三匁六分給與せる割合なり其眠起は左の如し

掃立　斷飼　蛻蛻

小石丸　四月廿六日午前九時　五月二日午前七時　五月三日午後四時
青熟　同　同　同

第二報

第二齡及第三齡飼育中の景況

早掃蠶第三齡の初日即ち本月三日は餉食以後曇天、晩掃蠶第二齡の初日即ち仝四日は早朝より雨天夜に入り始めて晴天翌五日は終日快晴六日も亦晴天なりしが七日に至りて雨氣を催し午後一時三十分雷鳴あり仝二時降雹其大なるものは重さ大約八厘其小なるものも四厘許りの量目あり須臾にして大雨沛然として至れり八日九日の兩日も亦曇雨殆ど相半ばせり溫度は略ぼ前齡と同樣兎角冷氣勝ちにして平均六十度以上に昇れる日は僅に五日六日の兩日に過ぎず又濕氣は稍や多き方なりしが蠶室内は七十度前後の溫を保ち濕度は常に七十度以内にして蠶座の乾燥稍や悪しきを覺へたるは眠中即ち八日九日の兩日のみ其經過は至つて良好なりき乃ち眠起の早中晩を揭ぐれば左の如し

早　掃　中　掃　晩　掃

二　齡（餉食）五月三日午前四時　九月四日午前四時
（斷飼）同月六日午後十一時　同月八日午前八時
（蛻蛻）同月七日午後八時　同月九日午前九時

三　齡（餉食）五月三日正午十二時
（斷飼）同月七日午後十一時
（蛻蛻）同月九日午後四時

傳習室内は平均六十九度八分の溫を保ち濕度は平均六十九度六分たらしむるを得て五日二十二時間を以て本齡を終れり此間に於ける給桑回數三十二回總給桑量二十七貫〇二十八匁四分の内十二貫八百六十一匁八分は小石丸に給與せり其蟻量一匁に對する給桑量は六百四十七匁九分五厘とす而して十四貫百六十六匁六分は青熟の給桑量にして其蟻量一匁に就ては六百五十四匁九分五厘に當れり其眠起は左

の如し

小石丸	五月三日午後四時	同月八日午前八時	同月九日午後二時
青熟	同	同	同

◎蠶絲に關する提出案

目下開期中の第六議會（兼議院議員の提出されし議案にして蠶絲に關するものは生絲直輸出奬勵法案（神鞭代議士外三名）生絲檢査所法案（魚住同外二名）蠶種檢査法案（駒林同外七名）蠶業傳習所建議案（新井（毫）同外五名）なり

◎琉球の產繭

沖繩縣人にして大日本蠶絲會員たる西常央氏より頃日農商務省農務局へ繭五升許りを送越されたり右の繭は本年二三月の頃農商務省の命を帶び九州七縣及沖繩縣聯合共進會の審査官として該地に出張されし大日本蠶絲會幹事高橋信貞氏が官務の餘暇を以て掃立より上簇に至るまで指揮監督の勞を執りて結繭せしめたるものにして其品質頗る佳良之を內地の產繭に比するも其上位に居ると云ふ現品は農商務大臣の閲覽を了へたる後は西ヶ原蠶業試驗場に於て絲絲試驗を行はゝ愈なれば其結果は他日更に報道するの期あるべし

◎同伸會社重役の更迭

横濱の同伸會社にては一改革を爲し重役に交迭あるべしとは先般來世上にて噂する所なりしが果して本月一日を以て同社の取締役諸氏は正副社長の互撰を行ひたるに社長には鬼頭帰二郎氏（新）當撰し副社長には末木直已（新）及高木三郎（再）の二氏當撰し而して前の社長河瀨秀治氏常詰取締役となれり然るに鬼頭氏は豫て胃病にて難まれしが藥餌効なく去る七日死去されたるに由り渡邊洪基氏其後を襲ひ同氏は去る十四日を以て同伸會社に出頭し新任の披露を爲したりとぞ

◎栃木縣下の蠶業

栃木縣下に於ける養蠶及製絲に對する郡別の詳細なる調査を大日本蠶絲會員にして評議員たる永島禮七氏より寄せられたれども記事輻輳するの故を以て已むなく全管に就ての計數を掲ぐることゝせり

養蠶家の數　二十五年は二萬七千四百〇一戸にして二十六年は三萬〇七百十六戸なり即ち增すこと三千三百十五戸　蠶卵紙の掃立枚數　二十五年は三萬〇六百十七枚にして二十六年は三萬六千二百三十三枚なり即ち增すこと五千六百十六枚　桑園の段別　二十五年は三千百八十五町九段にして二十六年は三千九百三十四町なり即ち增すこと七百四十八町一段　養蠶家一戸に對する蠶卵紙の掃立高　二十五年は平均一枚一分二厘にして二十六年は仝一枚一分六厘なり即ち增すこと四厘　養蠶家一戸に對する桑園の段別　二十五年は平均一段一畝十九歩にして二十六年は仝一段三畝〇三歩なり即ち增すこと一畝十四歩　縣內繭の產額概算（二十五年分）一萬六千六百四十三石　縣內生絲の產額概算（二十五年分）一萬〇七百七十四貫目　縣內屑絲、眞綿、產卵紙の產額概算（二十五年分）屑絲は四千八百五十一貫目にして眞綿は六百七十一貫目及蠶卵紙は六萬四千八百六十七枚なり

編者曰く以上記する所蠶は春蠶、夏蠶、秋蠶の三種染は模刈、中刈、立染の三種繭は玉繭、屑繭、出殼繭の三品生絲は檢査（器

機及急絡）折返し道、提道、島田道、其他又府縣は賣斗絲、玉絲、生皮等其他屑物を包括するものと知るべし

◎小學女生徒の養蠶

佐賀縣佐賀郡春日高等小學校にては三年級及四年級の女生徒に蠶兒を飼育せしむることゝなし本年より之を實施せり蠶の種類は小石丸にて去月十五日に掃立てたり同縣の小學校にて女生徒に養蠶の一科を課せしは同校を以て嚆矢とすと云ふ

◎繭市場を設置せんとす

山梨縣甲府の有志者間には生絲繭の取引所を設置せんとするの計畫ある趣なるが夫れ〳〵の手續きを經て允許を得るまでには多くの日子を要することにて迚も本年の間に合ふべくもあらざれば差當り季節の迫り居る繭の市場を設置して仲買人及製絲家の便益に供せんとて已に協議も密ぼ纏りたりと云ふ今其仕組みなりと云ふを聞くに市場の前には一日三四回づゝ絲況を爲替相場とを掲示し以てツボを欺く手段を防ぎ而して仲買人が夕刻までに各村落より買來る繭をは翌日の午前十時までに販賣し若し同時刻までに賣捌けざるときは荷物を抵當にして資本を貸與へ買出しの融通を開くる趣向なる由至極親切便利なる方法と謂ふべし

◎三陸蠶業家の大懇親會

先月より仙臺市に於て開設せる共進會を機として催したる宮城、岩手、青森三縣の聯合蠶業家大懇親會は豫期の如く去る五日午後第五時より同市東三番町の五城館に於て開かれたり來會者は農商務次官金子堅太郎農務局長藤田四郎宮城縣知事勝間田稔の諸君を始めとし共進會の審査官事務官其他にて無慮二百餘名顧て席定まるや宮城縣の大日本蠶絲會員海上靜氏開會の主意を陳べ次に金子農商務次官一場の演說を爲し次に岩手縣蠶業家總代岩田宗臣氏の演說及青森縣蠶業家總代福田勇記氏の演說あり夫より獻酬の間に歡を盡くし非常の盛會なりしと云ふ

◎生絲取引の拒絕

横濱居留地百九十八番館ハイチマッ商會の絲方ステレールが生絲取引上常に不法不德義の所爲ありて內商を苦しむることは再三再四に止まらざる由にて同港生絲賣込商諸氏は其事橫日增しに募るを憤ほり同館に對する處置を議する爲め去る十日午後第四時より貿易商組合會館樓上に於て睦講と稱する生絲商團體の臨時總會を開きしが當日の出席者は二十七名にして種々審議の末彼れ外商が自ら悔悟するまで斷然取引を拒絕することに毫も異議なく滿場一致を以て可決したれば尙ほ此旨を組合頭取に申告し組合總會の議決を以て公然發表することゝなし即日申告書及決議書を差出したるに付き蠶絲業組合頭取原善三郎氏は翌十一日午後第四時より役員會を開きて本件紛議に關する事を協議したる上更に組合總會を開きたり又生絲問屋は公然組合の議決は經ざるも取引拒絕の事は既に同日より實行し來りしが頃日盟約書に調印をも爲したりとぞ

◎製絲場彙報

那須原の製絲場　栃木縣那須郡狩野村大字南鄕屋九番地は那須郡長安藤小次郎氏の所有地なりしを山梨縣西山梨郡山城町の人野中惣右衛門同縣甲府市の人落合とくの兩氏が讓受けて過日來同地內に間口四間奥行二十四間、間口十八間奥行三間の製絲工場と外に繭絲貯藏倉庫を建築中なりしが最早略ぼ出

來せるを以て本年の新繭より製絲せんとの計畫なりと元來同所は水利に便を缺くに由り五馬力の蒸汽機關を据付け製絲器械は百人取りとなし熟練なる擅當者を山梨縣より招延し工女には那須地方の子女を雇役する見込にて已に夫々募集に着手せる由該地方に產する繭は品質光澤共に佳好にして良絲を製出するには最も適當するのみならず產額の如きも將來大に增加する見込あるよりして斯くは新に工場を起すの運びに至りたるものなりと云ふ

佐屋川の製絲場　愛知縣中島、海東、海西三郡の蠶業は近年非常に進步せしも完全なる製絲場なければ迎海東郡佐依木村の有力家は這回合名會社を組織し其資本金は五萬圓として已に製絲蒸汽機關をも買入れ目下据付け中にて其他器具、倉庫等の準備中なる由其位置は同村大字須依に決定し工事出來の上は工女六十名を使用し本年新繭の出づるを待つて事業を始むる目論見にて其役員は組合長に三輪又三郎、副長に大河內竹次郎、會計員に佐藤悉、監査役に鈴木仙太郎、眞野比佐太郎、眞野守之助の諸氏當撰せりとぞ

山梨製絲社　笛川社の跡を受繼ぎて昨年創起したる山梨縣東山梨郡日下部村小原の山梨製絲社は釜數百七十八個なりしも社長窪川松次郎氏の管理其宜しきを得し爲め皮切りの賣込み八百十二枚の好結果を得又昨年中の平均價格は七百七十枚にて有名なる矢島組をも凌ぎたる程の勢ひなれば社員は一層奮發の意氣組にて先頃協議の上規模を擴張して五百釜に增加することに決し乃ち八幡、小原、井尻、鹽後、加納岩等の製絲家は皆な同社に持込むことゝなれり而して社長窪川氏は横濱の賣込問屋より低利の資金を引出し仕込みに不如意なる製絲家へ貸込む便法を設けたりと

南豫製絲株式會社　曩に燒失したる愛媛縣宇和島町の同會社は其後整理委員が奔走して百方盡力したる結果に由り舊藩主伊達家に於ても一萬圓の補助金を下附することに略ぼ承諾したるを以て此上は一株に付き五圓づゝ醵出して再興費に充つることにせんとて評議の末之に決定したれば夫より委員は各相別れて株主を勸說したる所頗る景氣宜しく孰れも贊成を表したるが爲め近日再び臨時總會を開きて再興の事を議する筈なりとぞ

宇摩郡蠶絲會社　愛媛縣宇摩郡川之江村に設けある仝社にては客月十五日開業式を兼ねて上棟式を施行せしが會社の屋上及門前には無數の球燈を吊し入口には綠門を造りて國旗を交叉し式場には周圍に幔幕を繞らし其正面には大花瓶を供へて種々の花を挿める等飾付けも十分に行屆き來賓には郡長、警察署長、收稅長を始め官吏、地方の有志者及松山、岡山、大坂等より招待したる紳士等無慮二百餘名にて社長大日本蠶絲會員紀伊卿篤氏の挨拶あり引續き數番の祝辭朗讀及演說あり式了りて祝宴を開きたり當日は餘興として餅撒きあり又時々烟火を打上げ夜分に入りては手踊等の催しありて非常の賑ひなりしと又十五、十六の兩日は器械の試運轉を爲し縱覽に供したる由

東振製絲合資會社　埼玉縣北葛飾郡行幸村の蠶業熱心家にして大日本蠶絲會員たる町田三造氏其他の人々相謀り今般製絲の改良を爲さんとを企て地方有志家の贊助を得て仝郡幸手町に一の模範製絲所を建設し四月十五日を以て開業式を施行せり當日は千家知事を始め郡長、郡吏、裁判官、裁判所書記、警察署長、衆議院議員、縣會議員、地方の有志者等數百名參場し知事其他來賓の祝辭若くは演說社長の答詞及業務擅當人町田氏の演述等あり其間にて時々奏樂を爲し以て式場の進退を節せり數千人の來

觀者は場の内外に充滿し而して早朝より器械を運轉し工女は製絲を爲して縱覽に供し當日より翌朝に掛けて數百本の燭火を打上げ非常の盛式なりし云ふ

◎蠶養神社に蠶祖大神

事は少しく奮聞に屬すれども好一對の話柄なれば爰に之を記載せんに京都太秦村の蠶養神社は由緒正しき祠なるも是まで當業者の之が祭典を營みしこともあらざりしが過般京都の絲、縮緬、織物、染物等の人々申合せ去月十一日大祭典を執行したる由又神奈川縣都筑郡二俣川村字今井にても同月六日を以て村内に鎮座せる蠶祖大神の祭禮を執行したるが同地方は近來漸く養蠶業の進歩したる爲め各村よりの參詣者多く當日は各村長、村會議員及各小學校の教員生徒等數百名參拜して餘興の催し杯もありたりとの事なり

◎米人日本式の養蠶を學ぶ

米國ユダ州ソートレー市の有志者は日本式の養蠶法を研究せんとて補助金の下附を同市會に提出したるが其教師には農牧業視察の爲め豫て當地に滯在中なる福島縣人加藤木周太郎氏を招聘することに決したりとぞ

◎各地通信

大阪府農學校　當校は去る二十二日三日に大掃致し候最早は極少量には候得共十二日最晩は二十六日に有之總蟻量は五十七匁に御座候生徒は養蠶科男子十名女子四十名農科生徒にして養蠶に從事すべき學年の者（即ち二年後期生）四十名都合九十名の多數に有之候得ば隨分賑は敷事共に御座候併し蠶室は廣く寄宿舍は之に適ひ居候に付大に混雜は免れ候得共年々女生徒の多數なる爲め本年は女子寄宿舍の建增し致候蠶室は男子と女子の二棟に致し其間に貯桑場を設け男子蠶室は二間半に三間の間七室女子部は全間五室有之南と北に四尺の廊下を附け二階は上簇室に充てる樣に致し平常は蠶具を悉皆入れ置候に十分に有之屋根は草葺に御座候寄宿舍は男子部十二疊の間五室女子部五室（目下女子部に教員室をも與へ居れり）製絲場は三間に八間の場所東西二棟にして西は坐繰二十四臺東は機械製絲二十人繰と揚返し十窓を設け候（昨年蒸汽釜を据付け昨夏より始めて蒸汽繰絲相始め候）貯桑場は三間に四間にして五尺程深く掘りたる蹴に御座候先づ大略右の通にして構造建屋の整頓なし居る事は恐く全邦に比類なかるべく微存候位置は當地にて古來有名なる御勝山の古跡にして眺望頗る宜しく且つ天王寺の東門を距る一直線の東十餘丁に有之候當地本年の氣候は大に暖和にして昨年に比すれば桑葉は十二三日程早く蠶見の掃立は一週間程早く致し候發生後兎角雨天續きにして晴天至て無之隨分困り居る者可有之撰擇に有之候當校の分未だ異狀無之仕合に候教員は小生と佐藤七三郎君其外に昨年の卒業生を一名助手に雇ひ外に書記一名小使一名にして他は一切生徒の手にてなし居候生徒には目下繭にて蠶綿の製造致させ居候（是は昨年より始めたり）然るに女子の手工には最も適當に有之本年は三十貫程繭を買入れ製造させ居候一貫目にて五十枚出來可申候其原料の價二十五錢に候故一枚の價五厘づゝ一日に熟練の者は二十枚出來せしむる者有之候過日文部大臣臨校の際も女子には專ら蠶綿の製造と外に簇の造り方を一覽に供（男生には桑の接木等を致させ候當校生徒は養蠶專修生五十名（男女共に）丈けは食費は校費にて支辨致し候事に相成居候依て府下の子女に限り有之候得共其近年は年々他府縣より一時轉籍入

核せるもの多々有之候樣に相成困り居候故に來年より公然管外生をも入核せしむる事に致度考へに御座候年期は二ヶ年に候得共昨年より二ヶ年以上經驗ある者は特に二年級に編入して一年にて卒業せしむる事に致し候府下傳習所は五ヶ所に開き橋本亮氏は牧方郡役所部内の傳習所教師に致し候巡回教師は十四名程に御座候云々四月二十七日附大日本蠶絲會員見玉實詮氏報

中武豐蠶社　本郡小平村大字小川の小川良助氏は地方養蠶の業振はざるを歎じ曩に西ヶ原蠶業試驗場に入り蠶兒の飼育及蠶種檢査法を習得し歸鄉の後中武豐蠶社と稱する養蠶實業者の一團體を組織し推されて社長となり大に斯業を擴張せり今其方法に就き要概を記せんに毎歲社員等の掃立つべき蠶種の枚數を豫算し該社の名義を以て兩毛或は信濃等の各地に一手注文を爲し社長之を檢査し其精良と認むる者のみを實業家に配布し又之に添ふに良教師（實業家十戸に一人乃至十數戸に一人）を以てし益す奮つて飼育の改良を促がせり現今該社に在る者二千有餘戸（掃立の蠶種枚數思ふべし）而して逐次社員を增加するの勢なり以て我地方蠶業改良の狀況を察すべし四月二十四日附東京府北多摩郡小金井村大日本蠶絲會員島田鄉左衛門氏報

廣島縣三上郡庄原村傳習所　嘗て貯藏し置きたる蠶種四枚半の内一枚は四五日前の暖氣にて既に變色し昨朝午前第十時頃五六十頭發生したるを以て直ちに室内に移し華氏寒暖計六十二三度より爾後漸次度數を增し七十二度位を目的にして今二十五日午前第十一時掃立たり然れども目下桑芽の都合に依り極めて低溫を旨とし可成的給桑を減じ大抵十日内外を以て一齡を終る見込なり

掃立年月	室内平均溫度	室外平均溫度	種類	數量	目下給桑回數	目下孵化生數	目下桑芽伸長
四月廿五日	六十九度六分 七十度六分	六十一度六分 七十三度一分	伊達錦	五匁五分	一日四五回	十二名	二寸餘

目下蠶兒の景況は其早き者は初眠中にて遲き者は漸く一昨三日迄に掃峻り申候掃立の模樣は甚不揃にて困難罷在候蟻量合計十六匁内伊達錦七匁五分又雲龍八匁五分　傳習生は都合十六名に有之候又去る二日降霜の害は當傳習所近傍の水邊に接したる部分は其害稍薄くして三分方之に反し土地高處にて而も苗代或は川、水溜等に遠き部分は八分方の被害に有之候乍併平均四分位かと被存候是が爲め稚蠶には自然硬葉を與ふる場合に相運び候故其發育稍緩慢に傾き居候

右四月二十五日附及五月四日附該養蠶傳習所教師片山莊治氏報

蠶業に關する集會其他　去月二十八日出京先より午後十時十三分王子發の汽車に投じ翌二十九日午前二時頃宇津宮着日光行第二發車に乘換へ文狹驛より山路三里餘を經て上都賀郡小來川村に着せしは午後一時なりき本縣より農學士東條平二郎君には第一汽車にて已に着村ありし故即時全村蠶桑改良組總集會場に至り開演點燈に及びて閉會せり夫より有志者の懇親會に臨み尙ほ其席上に於ても質問應答に時を移して生等の就眠したるは十一時頃なり三十日午前八時全村出發里餘山路を越え西大芦村に至りて腕車を倩ひ午後三時三十分鹿沼町より汽車に搭し八時歸宅せり夫より中二日を置きて去る三日には本郡氷室村に於て開きたる農蠶全志會の請求に應じて出張し全五日には上都賀郡西大芦村の農蠶談會へ出席して昨夜歸鄉せり弊家蠶兒は去月二十七日より三十日に至り收蠶濟に相成り其第一發生の如きは日々雨天勝ちにも拘はらず成育頗る速かなり又桑芽は前年に比し八九日位は生長宜し前記小來川及西大芦の兩村は日光山南三四里の處にして曉櫻滿開の期なり牡丹は堅く唇を結び桑等は未だ開綻せし

ものを見ず蠶兒の發生は來る十日より二十日の間に在るべし氷室村も當村より六七里北に當れる山間なるが故に是亦遲發生の地方なり云々五月八日附栃木縣安蘇郡界村大日本蠶絲會員永島禮七氏報

京都府中郡蠶況　本年春蠶掃立の數量は近年より多く早きは四月二十四五日頃遲きは四月三十日五月一日頃にして平年の掃立期日に比すれば平均七八日間早し天氣は毎日曇天及降雨のみにて此間晴朗の天氣なしと雖も當時蠶兒の發育は佳良なるが如しされど此の如き天氣なるを以て桑葉の發育は遲鈍なるに似たり附けて言ふ蠶種は孰れも微粒子毒多く良蠶種は非常に乏しかりき五月一日附該郡蠶絲業組合事務所報

愛知縣八名郡蠶桑狀況　去る四月十五日赴任以來郡下巡回講話を爲し爾後八ヶ所の養蠶傳習場巡回の事にて一周するに殆ど二十里毎日二ヶ所以上の巡視にて雨天等には隨分困却の折も有之候當地の蠶況早きは三眠に至り晩きも二齡に相成り發育の工合至極宜しく此分にて押行かば先づ好結果を得べき見込なり桑葉は蠶兒に先だち且つ昨年に懲りて掃立を控目に爲せしに由り價格は下落の一方に傾けり云々五月四日附該郡農林會養蠶巡回教師大日本蠶絲會員川合菊次郎氏報

雲州松江の蠶況　本年は氣候相進み平年に比し凡そ一週間早し蠶兒の早く發生せる分は既に三眠に就ける者有之候尤も頃日は氣候少しく冷氣なるが爲め發育も隨て遲れたるの有樣に有之候得共格別の異狀は無之に付今後に於て氣候順を得ば豐蠶疑ひなかるべしと存候五月二日附島根縣大日本蠶絲會員三島丈之助氏報

藤州高田郡丹比村傳習所　蠶兒の發育大に宜敷二十一日掃の分三十日飼食二十二日掃の分仝日午後十一時半飼食二十四日分眠中二十五日分促眠中にて何れも今日迄の處にては好況に御座候當地は非常に風の多き地にして毎日の大風四十度以下に下りしこと已に三回昨朝の如きは三十四度に至り朝は霧の籠り候故霜は來らざるべしと心得居りしに八時頃に至り霧晴れ日出で候處桑園の色變じ來り夕方迄の處にては其損傷二割方より少からじと被存候五月三日附該傳習所教師大日本蠶絲會古屋產太郎氏報

備後福山傳習所　近頃の氣候雨天勝ち且つ寒暖の昇降甚敷候に付當地方に於ても少しく失敗者願れ申候一昨二日昨三日の如きは朝四十度位に降り從て室內も溫度の平均を得ること難し然れども今日迄は異狀無之二日午後二時起揃申候百々氏下宮氏とも毎日一二回づゝ當場に被參候間都合宜敷候云々五月四日附該傳習所教師大日本蠶絲會員鈴木貞太郎氏報

京都府與謝郡加悅町高等養蠶傳習所　本所蠶兒掃立は早きは四月二十一日遲きは二十九日にして全く結了し蟻量合計四十二匁を得たり而して本年當地方の氣候たる掃立の當日より本日に至るの間快晴なりしは僅に三日許り其他は率ね降雨否らざれば曇天にして明かに太陽を見得らるゝ時迄は無之加之溫度の如きも隔差尤も甚しく最高七十八度最低四十二度に及べり且つ一日中と雖も晝夜十六七度以上の差は珍しからず爲めに天然飼育者は一般に多少の害を被り居候乍併本所は幸にして昨年に比し發育の摸樣一層宜しき方に御座候左に概表を以て其要領を報ぜん

種類	溫	溫	溫	飼育日計	絕食時	蟻一匁に付繭回數
	外	內				
小石丸	五八	八八	六七	七九	八日と九時	四十二時	二六七匁四	四五

又	昔	五八	八七	六七	七八	八日と十三時	仝	二七一〇	四六
二	化	五六	九〇	六七	七八	八日と一時	三十八時	二三一九	四四

右五月六日附該傳習所有氣館大日本蠶絲會員井上森藏氏報

大坂府農學校其他の蠶況　本場養蠶早きは去月十八日より毎日少々づゝ發生仝二十六日迄數日の掃立に相成り其内重なる掃立は二十二三の兩日に有之蟻量凡そ五十匁餘にして本日三眠起もあり二眠起もあり試驗育迄を算ふれば種類は三十四五種餘に御座候得共各種共先以て好況に有之候又目下の處には各部の蠶況頗好なる趣に承知仕候五月八日該府立農學校養蠶教師大日本蠶絲會員佐藤七三郎氏報

愛知縣湿見郡傳習所　去る二十一日掃下蟻量三十匁今日午前二時の桑にて掃下より三十一回目にて初眠桑留め大濕氣黑糠專用引青仕候處餘程一整にして大安心仕候濕氣の多き事は北海道より多少多く此は蠶室の位置に專ら關係可仕存候云々四月廿七日附該傳習所教師大日本蠶絲會員津田尙人氏報

廣島縣安藝郡奥海田村傳習所　一齡中の景況は曇雨の日多く殊に常に冷氣勝にして齡中室外温度の最低四十七度に下降し最高の時七十二度より昇らず濕氣亦時々甚多き場合も有之候得共室内は常に火力を以て萬障を排し就眠せしむるを得申候即ち

一齡日數六日二十時間　食桑中五日九時間　停食中三十六時間　室外平均温度六十度八　仝乾濕兩球の差平均二度二　室内平均温度七十度　仝乾濕兩球の差平均三度八　給桑回數四十四回　給桑量一匁に付二百九十四匁

四月二十七日午前七時を以て二齡催食をなせり二齡中は冷氣一層相加はり室外最低四十三度に下り最低の時尚六十九度を昇ちざる有樣なりしも幸に雨天無き爲め大に都合宜きを得無事就眠せしめ候即ち

二齡日數六日八時間　食桑中四日十七時間　停食中四十時間　室外平均温度五十七度三　仝乾濕兩球の差平均三度九　室内平均温度六十八度四　仝乾濕兩球の差平均四度二　給桑回數三十四回　給桑量六百二十八匁

二眠休食中近村二ヶ村程巡回實況を視察致候處當地は福島地方の所謂温暖育流義が先入したるものと見え好んで強火を用ひ蠶室は四方を密閉して空氣の流通を禁じ加ふるに天窓等皆無に付多くは室内空氣の腐敗等より空頭蠶等の軟化病を續發し年々失敗する者多きを占むるが如き有樣に御座候

三齡中は氣候漸く順に歸し暖和且つ乾燥なりしを以て蠶兒の發育大に捗り無事就眠せしむるを得申候

三齡日數六日二時間　食桑中四日十五時間　停食中三十五時間　室外平均温度六十二度七　仝乾濕兩球の差平均三度六　室外平均温度七十度九　仝乾濕兩球の差平均四度一　給桑回數三十二回　給桑量四匁に付六貫九百二十一匁

右の結果にて今九日午後三時蟻蜕せるに由り桑付申候

本月二日當廣島縣内北部各郡多く霜害に罹りたる趣新聞紙上其他人々の噂にて承知致候得共當傳習所は北方に大山を控へたるを以て毫も其患を見ず桑畑は依然として追々繁茂に傾き申候

右五月三日附及九日附該傳習所教師大日本蠶絲會員町田治助氏報

廣島縣山縣郡の霜害及蠶況　去る二日廣島縣下は大降霜あり別て余が傳習所々在の山縣郡は殊更甚だしと昨年五月三日關東の大降霜と略ぼ似たるものゝ如くに相見え申候地方の蠶兒今は大抵發生を爲し

早きは初眠遲きは紙扱き位の物多きに居る場合然るに実然の大降霜桑外にも慘憺の狀態を現はしたり早桑の如きは粗葉六七分平均枯槁に屬し晩桑の分未だ判然せずと雖も其害一層甚だしき樣相見受け申候爲めに五枚掃の當業者は二枚半を殘し養蠶せんとするものゝ如きは中に就き上等或は半限を捨て或は三分の一を殘し或は全部捨てたる者夥多有之趣に聞及候實に目も當てられぬ有樣なれども彼の緣故此の信用等にて全部捨棄る輩は少々づゝ桑葉を脊負て晝夜の別なく東西に往來せり右始末柄にも拘はらず余が受持たる傳習所近邊は妙なるかな意外に霜害少く十中の二割位の事にて掃立蠶見を減少する樣なる事も無御座幸も此上なき都合に有之右等の爲めか最寄蠶業家の子弟自家の蠶見を減少且つ全捨せしもの多人數有之を以て季節外れの入所申込續々ありて客月廿二日開所式の際は(男女込)二十名以内の者が今は二十七名の多きに居る次第に相成申候云々五月三日附該郡八重村傳習所教師渡邊半吉氏報

島根縣濱田町蠶業講習所　當所は去月廿一日四十五夜を收蟻し本日三眠桑止致し候處何の異狀も無之先づ此分にては幸に豐作ならんと相勵み居り候但天候は兎角不調窓外最低四十度は毎々にて去る二日は三十七度山間奥筋は嚴霜の爲めに青葉なく一眠起或は二眠蠶は空しく川流に投棄せらるゝものある由頃日當所濱田川に溺流する蠶見を實地見受候幸に當講習所桑園は霜害は無事なれども十數日間引續て强風なりしかば桑葉は痛く被害し平均二割の減ならんと評し居り候開く所に據れば廣島縣下も奥向山間は五分の霜害ありしやに傳へ候昨年開東の被害本年又々關西の災厄如何にも天公の無情を恨むのみに候本縣下の如きは當年位の霜害は廿年來嘗て見ざる所なりと申居り候云々五月八日附該傳習所教師大日本蠶絲會員保阪泰氏報

鹿兒島縣霜害及蠶況　當縣下の蠶見は目下通じて四眠前後に有之候處本年は氣候の變動非常に激しく近年稀なる年柄にて現に本月二日朝の如きは當地方は外氣華氏の三十八度に激降して降霜の爲め桑葉尠からざる損害を被り候得共幸ひ皆無迄には至らず蠶見の發育も頗る宜しく此後天災無之に於ては十日間内外には必ず美事なる成繭を認むべく云々五月十日附大日本蠶絲會員石塚萬之助氏報

栃木縣下都賀郡蠶況　當地掃立は五月二三日より五六日の間に致來候は是迄の慣例且つ桑葉の發芽も丁度宜敷御座候得共本年は例年に比し發生は一週日位相進み候得共桑葉の發芽は其割合に進み不申此先に至り或は桑葉に不足相生ずるやの恐れを抱き居るもの多數に御座候當時桑葉の賣買製種用になすべき分は一駄即ち三十六貫目一圓十錢二三十錢位に御座候蠶見は異狀なく二眠或は初眠桑付位に御座候過日來の冷氣にて發育も大に後れ申候當時朝夕は華氏四十四五度より五十一度晝間は六十度或は六十四五度に候得ば勢ひ室内には絶えず火力を用ひ居候五月十二日附大日本蠶絲會員林眞太郎氏報

◎郡役所の謝狀

愛知縣八名郡役所の依頼により農務局西ヶ原蠶業試驗場に於ては大日本蠶絲會員たる川合菊次郎氏を養蠶巡回教師として紹介されたるに頃日該郡役所より左の如き謝狀を同場に送越せりと云ふ

本郡農林會より願出之次第有之候に付曾て及御依頼候養蠶巡回教師選定方之義に付ては種々御配慮の末山梨縣川合菊次郎なる技術御逸向相成候へくに來管當來熟驚教授に從事致候に付樂評も殊に宜敷着々改良の歩を進め可申見込に有之當業者は勿論本郡の幸福鮮少ならず候是れ偏に御尊慮の宜しきを得たるの結果に有之感謝の至に候先は御挨拶迄如斯候也

◎會員歸京

宮城縣主催三縣聯合共進會審査長及審査官として客月以來仙臺に出張中の大日本蠶絲會員農學士渡部蒯仝仝田原休之丞の二氏は去る十三日歸京されたり

◎大日本蠶絲會員の加入

○通常會員

栃木　島田敬三　仝　荒籾順藏　仝　大橋代藏
仝　前橋清兵衛　仝　東條平次郎　仝　星善造
仝　田中廣吉　仝　木村嘉三　仝　島田靜一郎
仝　矢島國治　仝　糸井藤七　仝　福地善太郎
仝　大川太八郎　仝　出井篤太郎　仝　安生武一郎
仝　參木俊太郎　仝　金井直三郎　仝　早川忠吾
岐阜　金森安之助　仝　二宮鶴吉　仝　長野　上野勇次郎
福島　佐藤七三郎　福井　津田尙入　大分　大河原萬吉
鹿兒島　山本武熊　仝　河多潤十郎　沖繩　勝連朝功
仝　西　常央

（右島田敬三より早川忠吾に至る十八氏は水島禮七氏紹介金森安之助二宮鶴吉佐藤七三郎津田尙人の四氏は松永伍作氏紹介山本武熊河多潤十郎の二氏は石塚萬之助氏紹介勝連朝功西常央の二氏は高橋信貞氏紹介上野勇次郎大河原萬吉の二氏は各自に申込まる）

◎博覽會出品人心得

明治二十八年京都に於て開設する第四回內國勸業博覽會出品人心得は去る十九日を以て告示されたり同心得は十五條より成立せるが出品の數量に關し第六條左に掲ぐる物品を出品せんとする者は其定限の數量を差出すべし云々として各物品の數量を規定せる中に繭（每品五升）とありたり

◎正　誤

會報第貳拾貳號雜報傳內養蠶教師の項に於て佐藤七三郎氏の養蠶實傳助手は養蠶教師の誤り仝會員加入の項に於て東京千葉勝二は鹿兒島の誤り又同項高知茨木定興は定穀の誤り又會報第拾壹號本會經費精算報告書の差引金拾貳圓八拾壹錢六厘は五圓八拾壹錢六厘の誤り

廣　告

二十六年度本會經費精算報告

收入之部

一金四百九拾壹圓拾五錢六厘

內　譯

金五圓八拾壹錢六厘
金四百〇九圓七拾貳錢
金五拾五圓
金壹圓六拾貳錢
金貳拾壹圓

總　高

前年度越高
會費收入
寄附金受入
雜收入
一時繰替戻及借入金

支出之部

一金四百八拾壹圓五拾九錢壹厘　總高

内譯

金百圓　俸給
金拾壹圓　報酬
金九圓　雇人料
金六圓壹拾錢　旅費
金四圓拾錢五厘　器具費
金貳百壹拾壹圓八拾八錢壹厘　印刷費
金七圓〇六錢　筆紙墨文具代
金六拾貳圓七拾六錢　郵便電信料
金五圓〇六錢　運搬費
金拾八圓〇九錢五厘　借家料
金六圓八拾貳錢　雜費

差引

金貳拾七圓〇十錢三厘殘高

右之通候也

大日本蠶絲會

一金　壹　圓　　賛成會員　波多野鶴吉君

右本會へ寄附されたり